

三二人以上ヨリ二件以上ヲ受任シ其他不適當ノ所爲アリト認ムル時ハ裁判所ニ於テ之ヲ差止ムルコトアル可シ

○

○出訴期限規則 明治六年十一月
第三百六十二號布告

金穀貸借ヲ始メトシ物品賣買ヨリ其外種々ノ取引等ニ至ルマテ雙方ノ者互ニ受取渡ノ期限ヲ定メ條約ヲ結ビ置キタルニ一方ノ者其條約ヲ破リタル時ハ早速裁判所へ出訴イタシ不苦候處延期ノ勘辨ヲ加ヘ出訴ヲ見合候者モ有之是亦慈愛ノ人情ニテ尤ノ事ニ付早速出訴イタシ候トモ又ハ勘辨ヲ加ヘ候トモ人民ノ自由ニ任セ出訴期限ノ法則不相定候處右延期勘辨中數多ノ歲月ヲ過去リ出訴致シ候時ハ貸方借方請人證人ノ内死亡又ハ轉住又ハ失踪等ノ者モ有之事理曖昧ニ立至リ裁判上不都合不少候ニ付訴訟ノ事柄ニ因リ夫々出訴ノ期限ヲ定候條

來明治七年一月一日ヨリ後ニ結ビタル條約期限ニテ右出訴期限ヲ過去リ出訴セサル者ハ自分條約ヲ取消シタル者ト看做シ受取ルヘキ者ハ受取ヘキ權利ヲ失ヒ引渡スヘキ者ハ引渡スヘキ義務ヲ免レ候事ト相定メ候ニ付若シ出訴致シ候トモ取上不致候此旨布告候事

出訴期限規則

第一條

- 一 學藝ノ授業料
- 一 旅籠料
- 一 運送賃
- 一 飲食料
- 一 手附金
- 一 商人互ノ賣掛金
- 一 職人ノ手間代金
- 一 日雇人ノ給料

- 一 請負金
 - 一 芝居等ノ木戸錢又ハ機敷錢等
 - 一 男女藝者ノ揚代金
- 右ハ六箇月限

第二條

- 一 醫師ノ診診及ヒ藥料
 - 一 授業師ヨリ門弟ニ給與シタル飲食料
 - 一 商人ヨリ商人ニ非サル者ヘノ賣掛代金
 - 一 一箇年期マテノ奉公人給料
- 右ハ一箇年限

第三條

- 一 期限ヲ定メタル貸附米金及ヒ利息アレハ其利息
- 一 期限ヲ定メタル預米金及利息アレハ其利息
- 一 家屋及ヒ土地ノ借賃

- 一 小作米金
 - 一 證據金
 - 一 敷金
 - 一 物品ノ借賃又ハ損料
 - 一 養育料
 - 一 一七ヶ年期マテノ奉公人給料
 - 一 一期限ナキ年金及ヒ一生涯ノ年金
- 右ハ五箇年限

第四條 條約證書中期限ナキ者ハ出訴ノ日ヲ期限ト看做シ候故何時
出訴致シ候テモ苦カラサル事

第五條 従前取結ヒタル條約ニテ明治六年十二月三十一日以前ニ條
約期限ノ切レタル事件ハ右明治六年十二月三十一日ヲ條約ノ期限
ト看做スヘシ又従前取結ヒタル條約ニテ其期限ノ明治七年一月一
日後ニ及フ事件ハ條約期限ノ切レタル翌日ヨリ第一條第二條第三

條ノ種類ニ從ヒ出訴ノ期限ヲ起算致スヘキ事

但明治五年壬申第三百號布告第三條ニ定メタル規則ハ格別ナリ

トス

○勸解中出訴期限満期者ノ處置九年四月十四號達

治安裁判所或ハ裁判所支應ニ勸解願出候者勸解中出訴期限満期

ノ者處置方左ノ通可相心得此旨相達候事十四年第二號布告

第一條 勸解出願ノ者勸解中ニ出訴期限ノ満期ニ至ル者ハ其勸

解不調ノ翌日ヨリ滿三十日迄ハ出訴期限ノ猶豫ヲ與フ可シ

第二條 勸解調ハサル時右滿三十日迄ニ始審裁判所ニ出訴ヲ爲

サ、ルコ於テハ其事件ニ付訴スルノ權利ヲ拋棄シタルト看

做ス可シ

○負債者失踪後ノ訴訟成例明治八年一月第六號布告

十四年第二號布告ニ依リ
府縣裁判所トアルヲ始審
裁判所ト改稱ス

民法裁判上負債者失踪後ノ訴訟ハ失踪後三十六ヶ月ノ時間ハ採上ケ
サル成例ニ有之候處本年三月一日ヨリ以後ハ左ノ通相改メ候條此旨
布告候事

第一條 債主定約期限未滿内ニ負債者ノ失踪ヲ知ル時ハ定約満期ニ
至リ直ニ裁判所へ訴出ツ可キ事

第二條 債主未タ負債者ノ失踪ヲ知ラス定約満期又ハ出訴期限將ニ
盡ントスルヲ以テ裁判所へ出訴シ裁判所ノ奥書ヲ以テ負債者ニ掛
合始テ其失踪ノ事ヲ知ル時ハ右奥書訴狀ヲ再呈シ其旨届出ツ可キ
事

第三條 前條々ノ場合裁判所ニ於テハ一應訴狀採上ケ直ニ失踪者所
管ノ戸長へ申付失踪ノ年月日ヲ訊明シタル上債主差出シタル證書
ニ負債者何年何月何日家出ノ末行衛相分ラサルニ付追テ本人見當
ルカ又ハ三十六ヶ月ノ滿月後跡相續テ爲ス可キ者ニ掛リ此裏書證
書ヲ以テ再訴致ス可キ旨ヲ記載シ訴狀下戻ス可キ事

負債者失踪後ノ訴訟成例

六年第三百六十二號布告
出訴期限ハ本類ニ載ス

第四條 債主於テ前條ノ裏書證書ヲ受取置キタル上ハ本人見當リ又
ハ搜索三十六ヶ月ノ時限ハ明治六年十一月第三百六十二號布告出
訴期限ノ限内ニハ加算致サ、ル事

○ 控訴上告手續 明治十年二月
第十九號布告

沿革略記 明治五年十一月司法省第四十六號達ヲ以テ地方裁判
所及ヒ地方官ノ裁判ニ服セカル時ハ司法省裁判所へ
訴ルヲ許ス○七年五月第五十四號布告ヲ以テ民事控訴略則
ヲ定ム○八年五月司法省甲第六號布達ヲ以テ五年同省第四
十六號達ヲ廢ス○同年同月第九十三號布告ヲ以テ控訴上告
手續ヲ定ム○同年同月第九十四號布告ヲ以テ前ノ民事控訴
略則ヲ廢ス○十年二月第十九號布告ヲ以テ前令ヲ改正ス是
レ現行法ナリ

明治八年五月第九十二號布告大審院諸裁判所職制章程同年同第九十三

大審院諸裁判所職制章程
略ス

號布告控訴上告手續別冊ノ通改正候條此旨布告候事
但巡回裁判規則判事職制通則ハ削除候事

(別冊)

控訴上告手續

第一章

控訴ノ事

第一條 凡ソ始審裁判所ノ初審ニ服セスシテ再ヒ控訴裁判所ニ訴ヘ
覆審ヲ求ムル者之ヲ控訴ト云(十四年第二號布達ヲ以テ地方裁判所
ルヲ控訴裁判所ト
改稱ス以下倣之)

第二條 控訴ハ民事ニ止マリ刑事ニ及ハス

第三條 控訴ハ一タヒスルヲ得再ヒスルヲ得ス

第四條 始審裁判所ニ於テ裁判ノ言渡ヲ爲シタル時原告被告ノ雙方
又ハ一方ノ者其裁判ニ不服ナル時ハ裁判言渡ヨリ第七日マテニ裁
官渡ノ翌日 裁判言渡ノ事理ヲ熟考シ其翌日ニ至リ控訴スルヲ得

控訴上告手續

ヘン但シ訴訟ノ案件商事ニ係リ急速ニ控訴スルヲ要スルノ場合ニ於テハ七日内ト雖モ控訴スルヲ得

第五條 始審裁判所ノ裁判言渡ヨリ二箇月三十日ヲ以テ一月トスヲ過ルキハ控

訴スルヲ許サス但シ始審裁判所ヨリ控訴裁判所ニ至ルノ距離八

里ヨリ遠キキハ期限二箇月ノ外八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ増スヘシ

(十五年第二十一號布告ヲ以テ三月月ヲ二ヶ月ト改ム)

第六條 控訴ヲ爲ス者ハ其初審ヲ受ケタル始審裁判所ニ届ケ出ツヘ

シ但シ添翰ヲ乞フニ及ハス

第七條 前條ノ届ヲ受ケ取りタル始審裁判所ハ裁判言渡ノ執行ヲ停

止スヘシ若シ控訴裁判所ノ請求アル時ハ始審裁判所ニ於テノ訴狀

答書口書裁判見込等ヲ差出スヘシ

第八條 控訴裁判所ニ捧クルノ訴狀ハ訴答文例ニ照準スヘシ

第二章

上告總則ノ事

六年第二百四十七號控訴
答文例本類參看

刑事ノ上告ハ治罪法頒布
ニ付消滅

第九條 各裁判所ノ終審ヲ不法ナリトシ大審院ニ向テ取消ヲ求ムル者之ヲ上告ト云

第十條 上告スルヲ得ルノ事件ハ

第一 裁判所管理ノ權限ヲ越ユ

第二 聽斷ノ定規ニ乖ク

第三 裁判法律ニ違フ

第十一條 大審院ハ上告ヲ受クルノ所ニシテ控訴ヲ受クルノ所ニア

ラス故ニ控訴スヘキノ事ヲ以テ誤テ上告スル者アルモ之ヲ斥ケテ

理セス

第十二條 陸海軍ノ裁判權限ヲ越ル者ハ之ヲ大審院ニ上告スルヲ得

得

第十三條 凡ソ上告シタル者已ニ大審院ノ判決ヲ經レハ更ニ訴フル

ヲ得ス

第三章

陸海軍ノ上告ハ陸軍治罪
法海軍治罪法頒布ニ付消
滅

民事上告ノ事

第十四條 民事ノ上告スルコトヲ得ル者ハ巳ニ控訴裁判所ニ控訴シ其審判ヲ經タル者ニ限ル

第十五條 上告ヲ爲ント欲スル者ハ裁判言渡ヨリ二月内ニ上告狀ヲ大審院ニ捧クヘシ而シテ同時被告人ニ通知スルヲ要ス若シ原裁判所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キ時ハ二月ノ外八里毎ニ一日ヲ増ス此定期ヲ過レハ上告スルコトヲ許サス

上告狀中ニハ必ス左ノ事實ヲ記載スヘシ

- 第一 原告人ノ住所身分氏名
- 第二 代言人アレハ其住所身分氏名
- 第三 被告人ノ住所身分氏名
- 第四 證人又ハ引合人アレハ其住所身分氏名
- 第五 始審裁判所ニ出訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及
於ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日

第六 控訴裁判所ニ控訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及

於ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日

上告狀ハ正本一册及ヒ副本五册ヲ差出スヘシ
上告狀ニハ必ス左ノ書類ヲ添ヘ差出スヘシ

第一 始審裁判所ニ於テノ訴狀并ニ答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫

第二 控訴裁判所ニ於テノ訴狀并ニ答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫

第三 上告狀中ニ憑據トナス書類ノ寫ノ各書類ニ番號ヲ朱書シ
編シテ一册ト爲シ又ハ葉數多ニ付編シテ幾册ト爲シタル者

右ノ訴狀又ハ答書及ヒ憑據ノ書類ノ寫ヲ所持セサル者ハ原裁判所ニ出願シ裁判所ノ簿冊ヲ訟庭ニ取下ケ見坐ノ目前ニ於テ之ヲ寫シ
取ルコトヲ得ヘシ

若シ原裁判所ニ於テ書類寫取ノ出願ヲ許サ、ルニ因リ上告人其寫
ヲ出シ能ハサル時ハ其旨ヲ上告狀中ニ記載スヘシ

第十六條 上告者ハ其上告狀ニ添テ金拾圓ヲ大審院ニ預クヘシ若シ其金高ヲ預ケサルキハ上告ヲナスヲ得ス

第一 若シ上告ヲ取上ケサルキハ其預リ金ヲ没入ス

第二 若シ上告ヲ取上ケ原裁判ヲ破毀シタル時ハ預リ金ヲ還付ス

第三 若シ上告ヲ取上ケ被告人ト對審シタルノ後之ヲ斥ケテ原裁判ヲ破毀セサル時ハ預リ金ヲ没入シ又訴訟入費規則ニ照シテ被告人ノ費用ヲ償ハシム 被告人トハ上告者ノ相手方ヲ云

第十七條 上告ヲ爲ス者ハ先ツ原裁判所ニ届出ツヘシ原裁判所ニ於テハ書類ヲ三日内ニ大審院ニ遞送スヘシ

第十八條 上告ニ付テハ裁判ノ執行ヲ停メス大審院已ニ原裁判ヲ破毀スルニ至レハ即日原裁判所ニ通報シテ 大審院ヨリ郵信ヲ發ス 執行ヲ止メ更ニ審判落着ノ日ニ至テ前ノ執行ヲ取消シテ後ノ裁判ヲ執行セシムヘシ

九年司法省甲第五號布達
訴訟入費規則參看本
類ニ依ス

但内國人ヨリ裁判外ノ人民ニ對シ又ハ裁判外ノ人民ヨリ内國人ニ對スル上告ハ原裁判ノ執行ヲ停ムヘシ

第十九條 上告狀ハ原告人自ラ之ヲ捧クルモ又ハ代理人ヲシテ之ヲ捧ケシムルモ本人ノ意ニ任ス

第二十條 大審院ニ於テ判事審聽シ不當ナル上告ナリト決スル時ハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ受理セサルノ旨ヲ言渡スヘシ

第二十一條 判事審聽シテ當然ノ上告ナリトシ之ヲ判決スヘキ旨ヲ言渡シタル時ハ其後二日内ニ被告人呼出狀ヲ仕出ス可シ此ノ呼出狀ニハ上告狀ノ副本ヲ添フヘシ

第二十二條 被告人ハ呼出狀ヲ受取リタルヨリ三十日内ニ答辨書ヲ作り自身又ハ代理人ヨリ之ヲ大審院ニ捧クヘシ但被告人ノ住所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キハ八里毎ニ一日ヲ増スヘシ
第二十三條 大審院ニ於テ被告人ノ答辨書ヲ受取リシキハ院長ヨリ判事ノ中ニ於テ一人ノ主任ヲ命シ一件書類ヲ取纏メ遲緩ナク一件

始末書ヲ作ランメ然ル後ニ原被對審ノ日ヲ豫定シ三日以前ニ原被對審ノ呼出狀ヲ原被雙方ニ送達スヘシ

第二十四條 原被對審ノ節ハ判事席ニ臨ミ最初ニ主任判事一件始末ヲ宣讀シ次ニ原告ノ陳述次ニ被告ノ陳述次ニ原被交互ノ論辨ヲ審聽シ而シテ後ニ原告人上告理アリト決スルモハ何々ノ理由ヲ以テ原裁判所ノ裁判ヲ破毀スルニ付更ニ某裁判所ニ於テ裁判ヲ受クヘキ旨又ハ大審院ニ於テ裁判スヘキ旨ヲ言渡スヘシ
第二十五條 若シ原告人ノ上告理ナシト決スルモハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ斥クル旨ヲ言渡スヘシ

第四章

刑事上告ノ事 刑事上告ハ治罪法ニ因リ消滅ス

○外國人ニ係ル民事訴訟手續八年五月司法省甲第三號布達
內國人ヨリ外國人ニ係ル民事ノ訴訟手續左之通相定候條此旨布達候事(九年司法省甲第十三號布達ヲ除ク)

內國人原告ニテ外國人ニ係ル民事ノ訴訟ハ原告人其事由ヲ各開港開市場ノ府縣廳ニ申出其廳ノ添狀ヲ得テ被告人管轄ノ各國領事ニ申訴スヘシ
○外國人ニ係ル刑事及民刑附帶ノ訴訟九年九月司法省甲第十二號布達
明治八年當省甲第三號ヲ以テ布達候內國人ヨリ外國人ニ係ル民事刑事ノ訴訟手續中今般左ノ通相定候條此旨布達候事
第一條 內國人原告ニテ外國人ニ係ル刑事并ニ民刑附帶ノ訴訟ハ檢事其他ノ警察官東京ニテハ警視廳其ニ於テ之ヲ承ク直ニ他ノ府縣ハ地方官ニ於テ之ヲ承ク直ニ被告人管轄ノ外國領事ニ照會シ裁判ヲ求ムヘシ
第二條 前條ノ場合ニ於テ犯罪ノ爲メ損害ヲ受タル者其償ヲ求ル民事ノ訴ハ總テ本人ノ望ニ任スヘシ

○訴訟入費償却規則明治九年四月司法省甲第五號布達

沿革略記 明治五年九月司法省第十四號布達ヲ以テ訴訟入費償却假規則ヲ定メ從來ノ訴訟入費原被共自費或ハ町村費ヲ以テ充用シ來ルヲ向後一切曲者ノ負擔ニ歸セシム○同年同月同省無號達ヲ以テ右施行日限ヲ定ム○同年同月同省

十一月一月司法省丁第一號
號以テ本規則ハ當分
外國人民ヘハ施行セズ但
各國ノ内ニハ施行ス但
ノ分ハ此限ニアラス

十七年司法省甲部第五號
行テ以テ一枚貳拾四行一
行拾字一枚金貳拾錢
ト爲ス

第十七號布達ヲ以テ訴訟入費償却假規則定限ヲ定ム○同年十一月同省第三十一號布達ヲ以テ右定限ヲ改正ス○同年十一月同省第三十八號布達ヲ以テ右定限施行日限ヲ改ム○九年四月同省甲第五號布達ヲ以テ訴訟入費償却規則ヲ改正ス是レ現行法ナリ

訴訟入費償却規則左ノ通改正候條此旨布達候事

第一條 訴狀其外書類認料 一枚十六行十五字詰ニ付拾錢 但シ一枚以下モ同價

右定限

- 第一 原告人ノ訴狀ノ正本副本
- 第二 被告人ノ答書ノ正本副本
- 第三 訴狀亦ハ答書中ニ記載シ難キ證據ノ書類ノ寫
- 第四 審判中ニ原告又ハ被告ヨリ差出シタル證據ノ書類ノ寫
- 第五 訴訟中訴狀ニ關係スルノ事件ニ付原被雙方往復ノ文書
- 第二條 證人并ニ引合人手當 一日ニ付五拾錢(十二年司法省甲テ引合人ノ下差添人ノ三字ヲ刪ル) 但シ八里以外ヨリ罷出止宿ノ者ハ貳拾五錢ヲ増ス

右定限

裁判所ニ出席ヲ爲シタル日

第三條 證人并引合人滿八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ手當 一日ニ付五拾錢(十二年司法省甲第二號布達ヲ以テ)

テ引合人ノ下差添人ノ三字ヲ刪ル

第四條 證人并引合人旅費 滿八里ニ付拾錢歸路モ同斷(十二年司法省甲第二號布達ヲ以テ)

法省甲第二號布達ヲ以テ引合人ノ下差添人ノ三字ヲ刪ル

但シ八里ヲ越レハ每滿一里ニ付拾錢

右定限

第一 兩線ノ官道甲路ハ遠ク乙路ハ近キ時ハ現ニ甲路ヲ經ルト雖

モ乙路ヲ以テ計算ス可シ

第二 本條ハ日本國管内ヲ通行スル者ノ爲メ設ク

第五條 原告人又ハ被告人直ナル者ノ手當

一日ニ付五拾錢

九年四月司法省甲第六號
布達ヲ以テ第三條ハ追テ
相違スルマテ執行ニ及ハ

九年四月司法省甲第六號
布達ヲ以テ第六條ハ追テ
相達スルマテ執行ニ及ハ
ス

但シ八里外ヨリ罷出止宿スル者ハ貳拾五錢ヲ増ス
右定限

第一條ニ同シ

第六條 原告人又ハ被告人直ナル者八里以外ノ地ヨリ來リ滯留中ノ
手當 一日ニ付五拾錢

第七條 原告人又ハ被告人直者旅費

滿八里ニ付拾錢歸路モ同斷

但シ八里ヲ越レハ每滿一里ニ付拾錢

右定限

第四條ニ同シ

第八條 通辨雇料

一日ニ付三圓

右定限

第三條ニ同シ往返旅費ヲモ定額ノ通計算スヘシ

第九條 翻譯料

一枚ニ付十六行十五字詰二圓
但シ一枚以下モ同價

十七年司法省甲第一號告
示ヲ以テ一枚廿四行一行
貳拾字詰一枚金四圓ト爲
ス

右定限

第一條ニ同シ

第十條 測量繪圖認料

右定限

第一 長三百間ニテ盡ル時ハ

百間ニ付一尺ノ割 西ノ内一枚ニ付拾錢

第二 長六百間迄

百間ニ付五寸ノ割 同 拾貳錢

第三 長千貳百間迄

百間ニ付三寸ノ割 同 拾四錢

第四 長六千間迄

百間ニ付二寸ノ割 同 拾七錢

第五 長一萬二千間迄

百間ニ付一寸ノ割 同 貳拾錢

訴訟入費償却規則

第六 長一萬二千間以上

百間ニ付五分ノ割 同

廿四錢

一測量ニ及ハサル見取繪圖ハ間數ノ長短ヲ論セス大凡見積ヲ以テ簡便ニ圖引致ス可シ

但西ノ内一枚ニ付拾錢

第十一條 使賃

滿一里毎ニ拾錢一里未滿ハ五錢

但歸路モ同斷

右定限

第一 裁判所ニテ示談中雙方承諾ノ上原告被告雙方又ハ一方ノ者ヨリ遣シタル使賃

第二 裁判所ニテ示談中原告又ハ被告一方ノ者掛裁判役ノ檢印ヲ經タル使賃

第三 原告又ハ被告一方ノ者出訴中違約シテ出席セサル時掛裁判役ノ檢印ヲ經テ違約ヲ責ムル使賃

第四 原告被告雙方ノ爲メ又ハ一方ノ爲メニ雙方又ハ一方ノ者ノ申立ニ因リ裁判所ヨリ臨時ニ遣シタル使賃

第十二條 郵便并ニ電信料 定價

右定限

第十一條ニ同シ

第十三條 身代限ヲ爲スニ付裁判所又ハ縣廳又ハ村役場ニ納ム可キ評價人監定人等ノ日雇賃金ノ諸入費及ヒ身代限諸雜費 臨時計算ヲ以テ定ム

右ハ前數條ノ入費ニ先ツテ取立ツ可シ

○民事訴訟書類認メ方

今般第五號布告ヲ以テ訴訟用野紙規則廢セラレ候ニ付テハ本年四月一日以後民事訴訟ニ關シ大審院又ハ裁判所へ差出ス書類ハ都テ美濃紙又ハ之レト同尺度ノ紙ヲ用ヒ一枚貳拾四行一行貳拾字詰ニ書スヘキモノトス

但訴訟入費ハ明治九年當省甲第五號布達第一條第九條ニ定メ

○民事訴訟書類認メ方

今般第五號布告ヲ以テ訴訟用野紙規則廢セラレ候ニ付テハ本年四月一日以後民事訴訟ニ關シ大審院又ハ裁判所へ差出ス書類ハ都テ美濃紙又ハ之レト同尺度ノ紙ヲ用ヒ一枚貳拾四行一行貳拾字詰ニ書スヘキモノトス

但訴訟入費ハ明治九年當省甲第五號布達第一條第九條ニ定メ

タル割合ニ依リ書類認料ハ一枚金貳拾錢翻譯料ハ一枚金四圓ト相成ル義ト心得ヘシ

○代官人規則 明治十三年五月 司法省甲第一號布達

沿革略記 明治九年二月司法省甲第一號布達ヲ以テ代官人規則ヲ設ケ免許ヲ經サル者ヘ代官依頼スヘカラサルモノトス。○十三年五月同省甲第一號布達ヲ以テ改正ス是レ現行法ナリ

明治九年當省甲第一號代官人規則左ノ通改正候條此旨布達候事 但該規則ニ抵觸スル從前ノ布達ハ總テ廢止タル可シ

代官人規則

第一款 總則

第一條 代官人ハ法令ニ於テ代官ヲ許サレタル詞訟ニ付テ原告又ハ被告ノ委任ヲ受ケ其代官ヲ爲ス者トス

第二條 代官ノ業ヲ爲サント欲スル者ハ第四款ニ掲クル所ノ手續ニ依リ定式ノ試験ヲ經テ司法卿ノ免許ヲ受ク可シ

第三條 免許ヲ受ケシ代官人ハ大審院及ヒ諸裁判所ニ於テ代官ヲ爲スヲ得

第四條 代官人ノ免許ヲ得ル能ハサル者左ノ如シ

- 一 未丁年者
 - 二 身代限りノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者
 - 三 盜罪詐僞罪ニ付刑ヲ受ケタル者
 - 四 懲役禁獄一年以上ノ刑ニ處セラレタル者(十四年司法省甲第二號布達ヲ以テ改正)
 - 五 官吏准官吏及ヒ公私ノ雇人
- 第五條 免許ヲ受ケシ者ハ必ス第二款ニ掲クル所ノ代官人ノ組合ニ入リテ其規則ヲ守ル可シ若シ一時他管ニ出テ代官ヲ爲スルハ其地組合ノ規則ヲ遵守ス可シ
- 第六條 代官人新ニ免許ヲ受ケシ時及ヒ他ノ地ニ轉住セント欲スル

時ハ其業ヲ爲ス所ノ裁判所及ヒ檢事檢事ナキ地ハ檢事ノ職務ヲ攝行スル者以下之ニ倣フ并ニ議會長ニ其旨ヲ届ケ廢業ノ時ハ免許狀ヲ檢事ニ返納ス可シ

第七條 代言免許ハ滿一年月ヲ以テ算フヲ以テ限トシ免許料ハ金拾圓トス其業ヲ繼續セント欲スル者ハ毎年免許料ヲ納ム可シ既ニ納メタル免許料ハ廢業停業除名ノ時ト雖モ之ヲ還付セス

第八條 新規出願ノ者ハ免許狀ヲ受ル時免許料ヲ直チニ檢事ニ納ム可シ

引續出願ノ者ハ必ス免許期限ノ盡ル前願書ニ免許料ヲ添ヘ檢事ニ差出ス可シ但右手續ヲ爲シタルキハ期限後ニ係リ未タ免狀ノ下付有ラサルモ其儘代言ヲ爲スヲ得可シ

第九條 免許料ヲ納メサルヲ以テ免許ヲ得ヌ又ハ期限前ニ於テ引續出願ヲ爲サスシテ免許ノ効ヲ失ヒシ者再ヒ代言ヲ爲サント欲スル時ハ新規出願ノ手續ニ循フ可シ

第十條 免許狀ヲ紛失シ又ハ氏名ヲ改メシ者ハ更ニ免許狀下付ノ願

書ヲ檢事ニ出ス可シ但願書ノ副本ニ檢事ノ檢印ヲ受ケ置キ引替免許狀下付迄ハ之ヲ以テ免許代理人タルノ證ト爲ス可シ

第十一條 代言ヲ爲スニハ必ス詞訟本人ノ委任狀ヲ受ク可シ

第十二條 代言人ノ懲罰ハ第二款ニ依テ處分ス可シ

第十三條 代言人ノ所業ニ因リ生シタル詞訟本人並ニ相手方關係人ノ損害ハ其代言人ニ於テ之ヲ償フ可シ

第二款 議會

第十四條 代言人ハ各地方裁判所本支廳所轄每一ノ組合ヲ立テ議會ヲ設ケ左ノ目的ヲ以テ規則ヲ定メ契約ヲ固クス可シ但組合ハ各裁判區ノ廣狹遠近ニ依リ檢事ノ見計ヲ以テ之ヲ分合スルコトアル可シ

一 互ニ風儀ヲ矯正スル事

二 名譽ヲ保存スル事

三 法律ヲ研究スル事

十四年第二號布達ヲ以テ
地方裁判所ヲ始審裁判所
ト改ム

四 誠實ヲ以テ本人ノ依頼ニ應スル事

五 強テ本人ノ權利ヲ捏造セサル事

六 妄ニ言詞ヲ變改セサル事

七 故ナク時日ヲ遷延セサル事

八 相當謝金ノ額ヲ定ムル事

但該規則ハ必ス檢事ノ照閲ヲ經過シ其改正増補モ亦之ニ同シ

第十五條 組合毎ニ會長一名副會長一名又ハ二名ヲ毎年第一次會ニ

於テ投票ノ多數ヲ以テ定ム可シ若シ投票ノ數相均シキ時ハ先キニ

免許ヲ得タル者ヲ以テシ其時日相同シキ時ハ年長ノ者ヲ以テ之ニ

充ツ可シ

第十六條 會長ハ議會ノ管理ヲ爲シ副會長ハ會長ヲ補助シ會長差支

アル時ハ之カ代理ヲ爲ス可シ其任期ハ各滿二年トス但每期投票多

數ヲ得ル者ト雖モ其職務ヲ繼續スルハ三期ヲ以テ限リトス

第十七條 第三十三條ニ記載シタル條件ヲ犯ス者アル時ハ各代言人

ハ之ヲ會長ニ報告シ會長ハ之ヲ檢事ニ告發ス可シ

若シ會長告發ヲ遷延シ又ハ其所犯會長ニ係ル時ハ各代言人ヨリ直

チニ檢事ニ告發ス可シ

第十八條 議會ヲ開クハ毎年二次ヲ以テ定例ト爲シ其日數一次十五

日ヲ過クルヲ得ス若シ已ムヲ得サル場合ニ於テ期日ヲ延サントス

ルカ又ハ臨時會ヲ開カントスル時ハ必ス檢事ノ認可ヲ受ク可シ但

其會費ハ各代言人ニ於テ之ヲ擔當スル者ト爲ス

第十九條 會長ハ組合總員ノ名簿ヲ作り其本質族籍住所年齢及ヒ代

言免許ノ年月日ヲ記シ轉任廢業懲罰ノ事アル毎ニ其旨ヲ記ス可シ

第二十條 議會中詞訟事件ニ付參會スルヲ得サル場合ニ於テハ其旨

ヲ會長ニ届出ツ可シ

第二十二條 會長及ヒ副會長ト雖モ代言ノ職業ニ付テハ一般ノ代言

人ト異ナルナシ

第三款 懲罰

第二十二條 代理人左ノ條件ヲ犯ス時ハ輕重ヲ量リ第二十三條及ヒ
第二十四條ニ依テ懲罰ス可シ

- 一 訟廷ニ於テ現行ノ法律ヲ誹議スル者
 - 二 訟廷ニ於テ官吏ニ對シ不敬ノ所業ヲ爲ス者
 - 三 訟廷ニ於テ相手方ヲ凌辱罵詈シタル者
 - 四 詞訟ヲ教唆シタル者
 - 五 證據ト爲ル可キ者ヲ捏造シタル者
 - 六 他人ノ詞訟ヲ買取り自己ノ利ヲ圖ル者
 - 七 強テ謝金ヲ前收シ又ハ過當ノ謝金ヲ貪リタル者
 - 八 故ラニ時日ヲ遷延シ詞訟本人并ニ相手方關係人ノ妨害ヲ爲シタル者
 - 九 議會組合ノ外私ニ社ヲ結ヒ號ヲ設ケ營業ヲ爲シタル者
 - 十 議會ニ於テ定メタル取締規則ヲ犯シタル者
- 第三十三條 懲戒ノ目次左ノ如シ

一 譴責

二 停業

三 除名

第二十四條 所犯法律ニ該ル者ハ法律ニ依テ處斷シ仍ホ第二十三條ノ罰目ヲ併科スルコトアル可シ

第二十五條 譴責ハ止タ呵責シテ業ヲ停メス停業ハ一月以上一年以上以下其業ヲ停メ除名ハ代理人名簿ノ名ヲ除キ三年ヲ經ルノ後ニ非サレハ復タ代理人タルヲ得ス若シ其所犯ノ情狀重キ者ハ終身之ヲ許ス

第二十二條ノ懲罰ヲ受ケタル者アルキハ其旨ヲ裁判所ノ扣所ニ揭示ス可シ

第四款 出願

第二十六條 代言免許ヲ願フ者ハ第二十九條ノ書式ニ倣ヒ願書ヲ作り現任局長又ハ區長ノ奥印ヲ受ケ履歷書ヲ添ヘ其所轄ノ檢事ニ差出シ

定式ノ試験ヲ受シ可シ

第二十七條 出願定月

二月 八月 各上半ヶ月ヲ以テ限リト爲ス

第二十八條 試験ノ課目左ノ如シ

- 一 民事ニ關スル法律
- 二 刑事ニ關スル法律
- 三 訴訟ノ手續
- 四 裁判ニ關スル諸規則

第二十九條 願書及ヒ履歷書書式

(書式略之)

○代人規則 明治六年六月 第貳百拾五號布告

人民ニ一般商業及ヒ其他ノ事ニ因リ代人ヲ以テ契約取引等致シ候規則
別紙ノ通被定候條此旨相達候事

(別紙)

代人規則

第一條 凡ソ何人ニ限ラス已レノ名義ヲ以テ他人ヲシテ其事ヲ代理

セシムルノ權アルヘシ

但シ本人幼年等ニテ其事理ヲ辨シ難キ時ハ其後見人及ヒ親族ノ
者協議シ上代人ヲ任スルヲ得ヘシ

第二條 凡他人ノ委任ヲ受ケ其事件ヲ取扱フ者ハ代人ニシテ其事件

ヲ委任スル者ハ本人ナリ故ニ代人委任上ノ所行ハ本人ノ關係タル

ヘシ

第三條 凡代人ハ心術正實ニシテ滿貳拾歲以上ノ者ヲ撰ムヘシ(九年

十四號布告
ヲ以テ改正)

第四條 代人ハ總理代人部理代人ノ別アリ總理代人ハ其本人身上諸

般ノ事務ヲ代理スル者ニシテ部理代人ハ特ニ其委任スル部内ノ事務ヲ代理スルヲ得ル者トス

第五條 凡ソ本人ヨリ代人ヲ任シ他人ト契約取引等ヲ爲サント欲スル時ハ必ス實印ヲ押シタル委任狀ヲ與フ可シ

但其家業取扱フ場所ニ於テ通常ノ事務ヲ取扱ハシムルノ類ハ別段委任狀ヲ與フルニ及ハス

第六條 委任狀ハ總理代人又ハ部理代人タル事及ヒ其委任シタル權限ヲ明白ニ記載スヘシ

第七條 委任狀書式左ノ通

拙者共 儀某ノ事件ニ付何誰ヲ以テ總理代人ト定メ拙者ノ名義ニテ左ノ權限ノ事ヲ代理爲致候事

一何々ノ事但權限ノ次第ヲ分條記載ス可シ

右代理ノ委任狀仍而如件

年號何年何月何日

住所身分姓名印

手前何事何日

後見人等ハ住所身分何誰ノ後見人何誰ト記ス可シ

第八條 代人ヲ任スルノ期限ハ豫メ規定シ難キモノト雖モ其本人幼弱疾病事故等ニテ長ク委任セントスル時ハ其地方ニ新聞紙アラハ之ニ記入セシメ世上ニ公布スヘシ

○

○證書類公私共年月日ヲ記載ス明治六年六月第二十二號布告

來ル七月十日以後ノ證書類及ヒ公私ノ文書ニハ總テ年號月日ヲ記載可致若シ疎漏ニシテ年月日ノ内何レニテモ略記シタル時ハ裁判上證據ニ不立立候事

○年月日略記ノ諸證書類受理裁判方八年二月法律省甲第一號布達
明治六年第二十二號ヲ以テ年月日ノ内何レニテモ略記シタル諸證書類及公私文書等ハ裁判上證據ニ不立立旨布告相成候ハ其

證書類公私共年月日ヲ記載ス

證書全ク證據ニ不相立儀ニハ之レナク唯々其年月日ノ早晚ヲ定ムヘキ證據ニ相立タル儀ニ候條右等ノ證書ヲ以テ年月日ノ早晚ニ拘ハラヌ其記入ノ事件ニ付訴訟ニ及フハ取揚ケ裁判ニ及フヘシ候條此旨布達候事

○預金穀證書ノ裁判區別 明治七年三月第二十七號布告

預金穀ハ其證書中ニ封印ノ儘預リ置候歟或ハ預リ中融通使用ヲ爲サルノ明文ナキ分ハ出訴候トモ本年五月一日ヨリ以後ハ貸金同様ニ裁判可致候條此旨布告候事

○連借證書ノ分擔及償却方 明治八年四月第六十三號布告

金銀其他借用證書中借主數名連印ニテ各自分借ノ員數ヲ記載セサル分ハ右連印中失踪又ハ死亡シテ相續人ナキ者等有之トモ其借用シタル金銀其他ノ總額ヲ其連印中現在ノ者ヘ償却可申付候條此旨布告候事

但右證書中分借ノ員數無之トモ別ニ分借ノ明證アルハ此限ニアラス

○金穀借用證書貸主ヨリ他人ヘ讓渡手續 明治九年七月第九十九號布告

金穀等借用證書ヲ其貸主ヨリ他人ニ讓渡ス時ハ其借主ニ證書ヲ書換ヘシムヘシ若シ之ヲ書換ヘシメサルニ於テハ貸主ノ讓渡證書有之モ仍ホ讓渡ノ効ナキモノトス此旨布告候事
但相續人ヘ讓渡候ハ此限ニアラス

○賣買約定書趣意ヲ明確ニ書セシム
明治八年五月 第八十七號布告
 諸品賣買取引心得方定書去ル明治四年九月布告ニ及ヒ置候處自今相廢シ候尤向後賣買ノ約定ハ勿論其他諸取引ノ約定ヲ爲ス證書ニハ成ルヘキ丈ケ其約定ノ趣意ヲ明確ニ書載セ疎漏曖昧ノ事之レナキ様注意可致此旨布告候事

○諸證書ノ姓名ハ必ス自書實印ヲ用エ
明治十年七月 第五十號布告
 諸證書ノ姓名ハ必ス本人自ラ書シテ實印ヲ押スヘシ若シ自書スルコト能ハサル者ハ他人ヲシテ代書セシムルヲ得ルト雖モ必ス其實印ヲ押

スヘシ其代書セシ者ハ本人姓名ノ傍ニ其代書セシ事由ト己レノ姓名トヲ記シテ實印ヲ押スヘシ
 但シ本文諸證書トハ契約ノ證書(金穀地所建物貸借賣買讓與并預リ證書等凡テ民事上相互ノ契約ニ係ルモノヲ云フ)ニ限ルモノトス
(十年第六十四號布告ヲ以テ但書追加)
 右布告候事

○金穀貸借請人證人辨償規則
明治八年六月 第二百二號布告
 沿革略記
明治六年六月 第九十五號布告ヲ以テ金穀借主身代限請人證人ノ區別ヲ制定ス
○八年六月 第二百二號布告ヲ以テ金穀貸借請人證人辨償規則ニ改正ス是レ現行法ナリ
 明治六年 第九十五號布告金穀貸借請人證人辨償規則本年十月一日ヨリ左ノ通改正候條同日以後借用證書ヘ加印候者ハ改正ノ通可相

賣買約定書趣意ヲ明確ニ書セシム 諸證書ノ姓名ハ必ス自書實印ヲ用エ 金穀貸借請人證人辨償規則

心得此旨布告候事(八年第一百二十一號布告ヲ以テ施行ノ二字ヲ削リ候條ノ下ニ同日以下二十二字ヲ加フ)

金穀貸借請人證人辨償規則

第一條 金銀借用返濟相滞リ本人身代限濟方申付候上不足相立候節ハ其不足ノ分請人ハ濟方申渡シ猶不相濟ニ於テハ其請人ヲモ身代限申付其上不足相立候ハ、借主並ニ請人ハ勿論其相續人ニ至ル迄身代持直シ次第皆濟可致事

第二條 借主逃亡又ハ死去跡相續人無之時ハ其請人ハ濟方申渡シ候上不相濟ニ於テハ身代限申付猶不足相立候ハ、請人ハ勿論其相續人ニ至ルマテ身代持直シ次第皆濟可致事

第三條 身代限申付候上不足相立身代持直シ次第皆濟可致旨左ノ雜形之通裁判所ニ於テ其原證文ノ裏ヘ記シ押印ノ上貸主ヘ可相渡置事

(裏書雜形略ス)

○社寺ノ負債氏子檀家ノ連署ヲ要ス明治十年五月第四十三號布告

神社并寺院ニ於テ其社寺ノ爲メ金穀ヲ借入ル、トキ若クハ金穀ヲ借入ル、爲メ社寺附地所除稅地外建物什器寶物古文書類等ヲ抵當ト爲ストキハ必ス氏子檀家ト協議シ總代二名以上ノ連署ヲ要スヘシ若シ此連署ナキトキハ總テ該社寺神官僧侶ノ私債ト看做シ縱令右ノ抵當アルモ其効ナキ者ト爲スヘシ此旨布告候事

○第十二類

○教育令明治十三年十二月
第五十九號布告

沿革略記 明治三年二月大學ニ於テ大中小學ノ規則ヲ定ム○四年十一月布告ヲ以テ府縣學校ハ自今總テ文部省ニ管轄セシム○同年十二月文部省布達ヲ以テ東京府下ニ共立小學校洋學校女學校ヲ開キ規則ヲ定メ士民學資ヲ納レ就學スルコトヲ許ス○五年八月第二百十四號布告ヲ以テ自今華士族農工商及婦女子ヲシテ必ス就學セシムルモノトシ尋テ文部省布達ヲ以テ學制ヲ定メ全國ヲ區分シテ大中小學區トス○十二年九月第四十號布告ヲ以テ前ノ學制ヲ廢シ更ニ教育令ヲ制定ス○十三年十二月第五十九號布告ヲ以テ前令ヲ改正ス是レ現行法ナリ

明治十二年九月第四拾號布告教育令左ノ通改正候條此旨布告候事

第一條 全國ノ教育事務ハ文部卿之ヲ統攝ス故ニ學校幼稚園書籍館等ハ公立私立ノ別ナク皆文部卿ノ監督内ニアルヘシ

第二條 學校ハ小學校中學校大學校師範學校專門學校農學校商業學

校職工學校其他各種ノ學校トス

第二條 小學校ハ普通ノ教育ヲ兒童ニ授クル所ニシテ其學科ヲ修身
讀書習字算術地理歴史等ノ初步トス土地ノ情況ニ隨ヒテ野畫唱歌
體操等ヲ加ヘ又物理生理博物等ノ大意ヲ加フ殊ニ女子ノ爲ニハ裁
縫等ノ科ヲ設クヘシ

但已ムヲ得サル場合ニ於テハ修身讀書習字算術地理歴史ノ中地
理歴史ヲ減スルコトヲ得

第四條 中學校ハ高等ナル普通學科ヲ授クル所トス

第五條 大學校ハ法學理學醫學文學等ノ專門諸科ヲ授クル所トス

第六條 師範學校ハ教員ヲ養成スル所トス

第七條 專門學校ハ專門一科ノ學術ヲ授クル所トス

第八條 農學校ハ農耕ノ學業ヲ授クル所トス
商業學校ハ商賣ノ學業ヲ授クル所トス
職工學校ハ百工ノ職藝ヲ授クル所トス

以上數條掲クル所何ノ學校ヲ論セス各人皆之ヲ設置スルコトヲ得

ヘシ

第九條 各町村ハ府知事縣令ノ指示ニ從ヒ獨立或ハ聯合シテ其學齡
兒童ヲ教育スルニ足ルヘキ一箇若クハ數箇ノ小學校ヲ設置スヘ
シ

但本文小學校ニ代ルヘキ私立小學校アリテ府知事縣令ノ認可ヲ
經タルトキハ別ニ設置セサルモ妨ケナシ

第十條 各町村ハ學務ヲ幹理セシメンカ爲ニ小學校ヲ設置スル獨立
或ハ聯合ノ區域ニ學務委員ヲ置キ戸長ヲ以テ其員ニ加フヘシ

但人員ノ多寡給料旅費職務取扱諸費等ノ有無及其額ハ區町村會
之ヲ評決シ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ(十四年第三十五號布告ヲ
以テ但書給料ノ下九字ヲ
加フ)

第十一條 學務委員ハ町村人民其定員ノ二倍若クハ三倍ヲ薦舉シ府
知事縣令其中ニ就テ之ヲ撰任スヘシ

但薦舉ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第十二條 學務委員ハ府知事縣令ノ監督ニ屬シ兒童ノ就學學校ノ設置保護等ノ事ヲ掌ルヘシ

第十三條 凡兒童六年ヨリ十四年ニ至ル八箇年ヲ以テ學齡トス

第十四條 學齡兒童ヲ就學セシムルハ父母後見人等ノ責任タルヘシ

第十五條 父母後見人等ハ其學齡兒童ノ小學科三箇年ノ課程ヲ卒ラ

サル間已ムヲ得サル事故アルニアラサレハ少クトモ毎年十六週日

以上就學セシメサルヘカラス又小學科三箇年ノ課程ヲ卒リタル後

ト雖モ相當ノ理由アルニアラサレハ毎年就學セシメサルヘカラス

但就學督責ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文部卿ノ認可ヲ經

ヘシ

第十六條 小學校ノ學期ハ三箇年以上八箇年以下タルヘク授業日數

ハ毎年三十二週日以上タルヘシ

但授業時間ハ一日三時ヨリ少カラズ六時ヨリ多カラサルモノト

ス

第十七條 學齡兒童ヲ學校ニ入レス又巡回授業ニ依ラスシテ別ニ普通教育ヲ授ケントスルモノハ郡區長ノ認可ヲ經ヘシ

但郡區長ハ兒童ノ學業ヲ其町村ノ小學校ニ於テ試験セシムヘシ

第十八條 小學校ヲ設置スルノ資力ニ乏シクシテ巡回授業ノ方法ヲ

設ケ普通教育ヲ兒童ニ授ケントスル町村ハ府知事縣令ノ認可ヲ經

ヘシ

第十九條 學校ニ公立私立ノ別アリ地方稅若クハ町村ノ公費ヲ以テ

設置セルモノヲ公立學校トシ一人若クハ數人ノ私費ヲ以テ設置セ

ルモノヲ私立學校トス

第二十條 公立學校幼稚園書籍館等ノ設置廢止其府縣立ニ係ルモノ

ハ文部卿ノ認可ヲ經ヘク其町村立ニ係ルモノハ府知事縣令ノ認可

ヲ經ヘシ

第二十一條 私立學校幼稚園書籍館等ノ設置ハ府知事縣令ノ認可ヲ

經ヘク其廢止ハ府知事縣令ニ開申スヘシ

但公立小學校ニ代用スル私立小學校ノ廢止ハ府知事縣令ノ認可
ヲ經ヘシ

第二十二條 町村立私立學校幼稚園書籍館等設置廢止ノ規則ハ府知
事縣令之ヲ起草シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第二十三條 小學校ノ教則ハ文部卿頒布スル所ノ綱領ニ基キ府知事
縣令土地ノ情況ヲ量リテ之ヲ編制シ文部卿ノ認可ヲ經テ管内ニ施
行スヘシ

但府知事縣令施行スル所ノ教則ニ準據シ難キ場合アリテ之ヲ斟
酌増減セントシ府知事縣令之ヲ許可セントスルトキハ其意見ヲ
付シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第二十四條 公立學校ノ費用府縣會ノ議定ニ係レルモノハ地方稅ヨ
リ支辨シ町村人民ノ協議ニ係レルモノハ町村費ヨリ支辨スヘシ

第二十五條 町村費ヲ以テ設置保護スル學校ニ於テ補助テ地方稅ニ
要スルトキハ府縣會ノ議定ヲ經テ之ヲ施行スルコトヲ得ヘシ

十六年第四十四號市告公
立學校實用ノ地所
及租稅免除並十七年
七號市告地租條例第
七號布告地租條例第
參有第四類ニ載ス

第二十六條 公立學校ノ敷地ハ免稅タルヘシ

第二十七條 凡學事ニ供スル寄附金等ハ其寄附人ヨリ指定セシ目途
ノ外ニ支消スルコトヲ得ス

第二十八條 削除

第二十九條 削除

第二十條 削除

第三十一條 削除

第三十二條 削除

第三十三條 各府縣ハ小學校教員ヲ養成センカ爲ニ師範學校ヲ設置
スヘシ

第三十四條 公立師範學校ニ於テハ本校卒業ノ生徒ニ試驗ノ後卒業
證書ヲ與フヘシ

第三十五條 公立師範學校ハ本校ニ入學セサルモノト雖モ卒業證書
ヲ請フモノアラハ其學業ヲ試驗シ合格ノモノニハ卒業證書ヲ與フ

ヘシ

第三十六條 削除

第三十七條 教員ハ男女ノ別ナク年齢十八年以上タルヘシ

但品行不正ナルモノハ教員タルコトヲ得ス

第三十八條 小學校教員ハ官立公立師範學校ノ卒業證書ヲ有スルモノトス

ノトス

但本文師範學校ノ卒業證書ヲ有セスト雖モ府知事縣令ヨリ教員

免許狀ヲ得タルモノハ其府縣ニ於テ教員タルモ妨ナシ

第三十九條 文部卿ハ時々吏員ヲ府縣ニ發遣シ學事ノ實況ヲ巡視セ

シムヘシ

第四十條 公私學校ニ於テハ文部卿ヨリ發遣セル吏員ノ巡視ヲ拒ム

コトヲ得ス

第四十一條 府知事縣令ハ管内學事ノ實狀ヲ記載シテ毎年文部卿ニ

申報スヘシ

第四十二條 凡學校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルコトヲ得ス

但小學校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルモ妨ケナシ

第四十三條 凡學校ニ於テ授業料ヲ收ムルト收メサルトハ其便宜ニ

任スヘシ

第四十四條 凡兒童ハ種痘或ハ天然痘ヲ歴タルモノニアラサレハ入

學スルコトヲ得ス

第四十五條 傳染病ニ罹ルモノハ學校ニ出入スルコトヲ得ス

第四十六條 凡學校ニ於テハ生徒ニ體罰毆ナ或ハ縛ヲ加フヘカラス

第四十七條 生徒試験ノトキハ父母或ハ後見人等其學校ニ來觀スル

コトヲ得ヘシ

第四十八條 町村立學校ノ教員ハ學務委員ノ申請ニ因リ府知事縣令

之ヲ任免スヘシ

第四十九條 町村立小學校教員ノ俸額旅費ハ府知事縣令之ヲ規定シ

テ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ(十四年第三十五號布告ヲ以テ)

(體額ノ下旅費ノ二字ヲ加フ)

第五十條 各府縣ハ土地ノ情況ニ隨ヒ中學校ヲ設置シ又專門學校農
學校商業學校職工學校等ヲ設置スヘシ

○小學校區域定メ方 明治十四年七月
第三十八號布告

教育令第九條小學校設置ノ區域町村ノ境界ニ仍リ難キ事情アル
トキハ別ニ區域ヲ畫スルヲ得ヘシ此旨布告候事

但本文ノ區域内ニ於テ會議ヲ要スルトキハ區町村會法第拾四
條及第拾五條ニ準據スヘシ (十七年第二十一號布
告ヲ以テ但書改正)

○數町村聯合中學校學務委員定メ方 明治十五年十二月
第五十六號布告

小學校設置區域ノ外數町村聯合シテ中學校等ヲ設置スルトキハ
特ニ其區域ニ學務委員ヲ置キ學務ヲ幹理セシムルコトヲ得

但教育令第十條但書及第十一條第十二條第四十八條ハ本文學
務委員ニ適用スヘシ

○公立學校敷地無代價下渡坪數制限 第十三年一月
第六號布告

中小學區學校設立ノ地所無代價下渡ノ儀ニ付明治七年九月第百三
十一號ヲ以テ相違置候處今般教育令布告候ニ付テハ自今公立小
學校ハ五百坪以内公立中學校公立專門學校ハ千坪以内ノ地ヲ該
學校設置ノ地所トシテ無代價ニテ可下渡候條官有地ニ於テ無差
支場所ヲ撰ヒ内務省ヘ可申出此旨相違候事

○公立學校敷地下渡方府縣ニ委任ス 第十三年三月
第八號布告

本年第六號ヲ以テ布達相成候公立學校設置ノ地所下與候義更ニ
其府縣ニ委任候條府縣限處分ノ後當省ヘ可届出此旨相違候事
但市街地及森林ハ此限ニアラス

○公立農學校等ノ敷地無代價下渡 第十四年三月
第十號布告

明治十三年一月第六號ヲ以テ公立小學校公立中學校公立專門學校
等設置ノ地所ハ無代價ニテ可下渡旨相違置候處今般教育令改正
布告候ニ付テハ自今公立農學校公立商業學校公立職工學校設置
ノ地所モ公立專門學校同様可取計此旨相違候事

○公立農學校實驗用ノ地所無借地料使用定限 第十六年十月
第十五號布告

公立農學校ニ於テ實驗用田圃ニ供スル爲メ官有地ヲ要スルトキ
ハ每一校五町歩以内無借地料使用差許候條官有地ノ内差支ナキ
場所ヲ撰ヒ内務省ヘ申出ヘシ此旨相違候事

第十三類

○徵兵令 明治十六年十二月
第四十六號布告

沿革略記 明治元年閏四月諸藩ニ命シテ石高ニ應シ兵ヲ徵ス○
三年十一月府藩縣士民ニ拘ハラス身體強壯ノ者ヲ選
ニ壹萬石ニ五人宛兵部省ニ差出スヘキヲ令シ徵兵規則ヲ
定ム○五年十一月詔シテ全國募兵ノ法ヲ設クルコトヲ告諭
ス○六年一月陸軍省ヨリ徵兵令ヲ頒布ス○八年十一月第百
六十二號布告ヲ以テ前キニ陸軍省布リ所ノ徵兵令ヲ改正ス
○十二年十月第四十六號布告ヲ以テ前令ヲ改正ス○十六年
十二月第四十六號布告ヲ以テ前令ヲ改正ス是レ現行法ナリ

徵兵令別冊ノ通改正ス

(別冊)

徵兵令

第二章 總則

第一條 全國ノ男子年齡滿十七歲ヨリ滿四十歲迄ノ者ハ總テ兵役ニ

服ス可キモノトス

第二條 兵役ハ陸軍海軍共ニ常備兵役後備兵役及ヒ國民兵役トス

第三條 常備兵役ハ別ナテ現役及ヒ豫備役トス其現役ハ三個年ニシテ年齡滿二十歳ニ至リタル者之ニ服シ其豫備役ハ四個年ニシテ現役ヲ終リタル者之ニ服ス

第四條 後備兵役ハ五個年ニシテ常備兵役ヲ終リタル者之ニ服ス

第五條 國民兵役ハ年齡滿十七歳ヨリ滿四十歳迄ノ者ニシテ常備兵役及ヒ後備兵役中ニ在ラサル者之ニ服ス

第六條 各兵役ノ期限已ニ滿ルト雖モ戰時或ハ事變ニ際スルトキ若クハ臨時ニ演習或ハ觀兵ノ舉アルトキ若クハ航海中或ハ外國駐劄中ハ其期ヲ延スコトアル可シ

第七條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ兵役ニ服スルコトヲ許サス

第二章 服役

第八條 陸軍現役兵ハ毎年所要ノ人員ニ應シ壯丁ノ身材藝能職業ニ

從ヒ步兵騎兵砲兵工兵輜重兵及ヒ雜卒職工ニ區別シ抽籤ノ法ニ依リ當籤ノ者ヲ以テ之ニ充ツ

海軍現役兵ハ海軍所要ノ人員ニ應シ沿海地方及ヒ島嶼ノ人民ヲ調査シ海軍ニ適スル職業ニ從ヒ水兵火夫職工等ニ區別シ抽籤ノ法ニ依リ當籤ノ者ヲ以テ之ニ充ツ但海軍志願兵徵募規則ニ依リ就役スル者ハ本令ノ限ニ在ラス

第九條 陸軍雜卒ノ現役期限ハ其職務ニ因リ之ヲ短縮スルコトアル可シ但常備兵役ノ全期ハ之ヲ減スルコトナシ

第十條 年齡二十歳ニ滿ダスト雖モ滿十七歳以上ノ者ハ現役ヲ志願スルコトヲ得

第十一條 年齡滿十七歳以上滿二十七歳以下ニシテ官立府縣立學校小學校ノ卒業證書ヲ所持シ服役中食料被服等ノ費用ヲ自辨スル者ハ願ニ因リ一個年間陸軍現役ニ服セシム

其技藝ニ熟達スル者ハ若干月ニシテ歸休ヲ命スルコトアル可シ但

常備兵役ノ全期ハ之ヲ減スルコトナシ

第十二條 現役中殊ニ技藝ニ熟シ行狀方正ナル者及ヒ官立公立學校小學校ノ歩兵操練科卒業證書ヲ所持スル者ハ其期末タ終ラスト雖モ歸休ヲ命スルコトアル可シ

第十三條 豫備兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ之ヲ召集シ常備隊ヲ充實シ又補充隊ニ編制ス平常ニ在テハ技藝復習ノ爲メ毎年一度六十日以内之ヲ召集シ又兵員實查ノ爲メ毎年一度點呼ヲ爲ス但海軍豫備兵ハ技藝復習ノ爲メ召集スルコトナシ

第十四條 後備兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ豫備兵ニ次テ之ヲ召集シ常備兵ノ後援ト爲ス平常ニ在テ其技藝復習ノ爲メ召集シ及ヒ兵員實查ノ爲メ點呼ヲ爲スコト豫備兵ニ同シ

第十五條 國民兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ後備兵ヲ召集シ仍ホ兵員ヲ要スルトキニ限り之ヲ召集シ隊伍ニ編制シテ軍役ニ充ツ

第十六條 第三章 免除及ヒ猶豫

第十六條 兵役ヲ免除スルハ癡疾又ハ不具等ニシテ徵兵検査規則ニ照シ兵役ニ堪ヘサル者ニ限ル

第十七條 左ニ掲クル者ハ徵集ヲ猶豫ス但其年補充員不足スルトキ又ハ戰時若クハ事變ニ際シ兵員ヲ要スルトキハ之ヲ徵集ス

第二項 兄弟同時ニ徵集ニ應スル者ノ内一人及ヒ現役兵ノ兄或ハ弟一人

第二項 現役中死没又ハ公務ノ爲メ負傷シ若クハ疾病ニ罹リ免役シタル者ノ兄或ハ弟一人

第三項 戸主年齢滿六十歳以上ノ者ノ嗣子或ハ承祖ノ孫

第四項 戸主癡疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサル者ノ嗣子或ハ承祖ノ孫

第五項 戸主

第十八條 左ニ掲クル者ハ其事故ノ存スル間徵集ヲ猶豫ス

第二項 「教正」ノ職ニ在ル者

十七年第十九號布達ヲ以テ勸修教育ヲ廢ス

- 第二項 官立府縣立學校小學校ヲ除クノ卒業證書ヲ所持スル者ニシテ官立公立學校教員タル者
- 第三項 官立大學校及ヒ之ニ準スル官立學校本科生徒
- 第四項 陸海軍生徒海軍工夫
- 第五項 身幹未タ定尺ニ滿タサル者
- 第六項 疾病中或ハ病後ノ故ヲ以テ未タ勞役ニ堪ヘサル者
- 第七項 學術修業ノ爲メ外國ニ寄留スル者
- 第八項 禁錮以上ニ該ル可キ刑事被告人ト爲リ裁判未決ノ者
- 第九項 公權停止中ノ者
- 第十九條 官立府縣立學校小學校ヲ除クニ於テ修業一個年以上ノ課程ヲ卒リタル生徒ハ六個年以内徵集ヲ猶豫ス
- 第二十條 左ニ掲グル者ハ豫備兵ニ在ルト後備兵ニ在ルトヲ問ハス復習點呼ノ爲メ召集スルコトナシ但戰時若クハ事變ニ際シテハ太政官ノ決裁ヲ經テ召集スルコトアル可シ

十七年第十九號布達ヲ以テ神佛敎導職ヲ廢ス

- 第一項 官吏判任以上及ヒ戸長
- 第二項 「教導職」試補ヲ除ク
- 第三項 官立公立學校教員
- 第四項 府縣會議員
- 第五項 官立府縣立醫學校ノ卒業證書ヲ所持シテ醫術開業ノ者
- 第二十一條 官省院廳府縣ニ於テ餘人ヲ以テ代フ可カラサル技術ノ職ヲ奉スル者ハ太政官ノ決裁ニ依テ徵集ヲ猶豫スルコトアル可シ
- 第二十二條 左ニ掲グル者ハ第十七條ニ照シテ徵集ヲ猶豫スルノ限ニ在ラス
 - 第一項 附籍戸主及ヒ附籍戸主ノ嗣子或ハ承祖ノ孫
 - 第二項 癡疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルニ非スシテ嗣子承祖ノ孫若クハ相續人ヲ罷メ更ニ定メタル嗣子承祖ノ孫
 - 第三項 年齡六十歳未滿ノ戸主癡疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生

計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルニ非スシテ戸主ヲ罷メ年齡六十歳以上ノ者ニシテ其跡ヲ繼キタル戸主ノ嗣子或ハ承祖ノ孫

第四項 分家シ又ハ絶家若クハ廢家ヲ再興シタル戸主及ヒ其戸主ノ嗣子或ハ承祖ノ孫

第五項 嗣子承祖ノ孫失踪シテ五個年ヲ經サル者ノ跡ニ定メタル嗣子承祖ノ孫

第六項 第二項第三項第四項ニ當ル嗣子或ハ承祖ノ孫ニシテ戸主癡疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルニ非スシテ戸主ヲ罷メ其跡ヲ繼キタル戸主

第七項 年齡六十歳未滿ノ者癡疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルニ非スシテ戸主ヲ罷メ其跡ヲ繼キタル戸主

第八項 嗣子承祖ノ孫又ハ相續人癡疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルニ非スシテ戸主ノ死亡跡若クハ戸主ヲ罷メタル跡ヲ繼カズ他ノ者ニシテ其跡ヲ繼キタル戸主

第九項 戸主失踪シテ五個年ヲ經サル者ノ跡ヲ繼キタル戸主

第二十三條 第十八條第一項第二項第三項第四項陸海軍生徒ヲ除ク第十九條

第二十一條ニ當ル者ト雖モ第三十五條ニ示シタル徵兵各自屆出期限即チ九月十六日以後ニ係ル者ハ徵集ヲ猶豫スルノ限ニ在ラス

第四章 徵兵區及ヒ抽籤

第二十四條 徵兵區ハ軍管師管及ヒ府縣ノ區域ニ從フ其軍管ニ從フモノヲ軍管徵兵區ト爲シ師管ニ從フモノヲ師管徵兵區ト爲シ府縣ニ從フモノヲ府縣徵兵區ト爲ス但府縣ノ管地兩師管ニ分屬スルモノハ師管毎ニ一區ヲ設ク
軍管及ヒ師管ノ徵兵區域ハ別表ニ掲ク

第二十五條 各鎮臺ニ屬スル歩兵ハ其師管徵兵區限り其他ノ諸兵ハ其軍管徵兵區限り之ヲ徵集ス但現役徵員及ヒ其補充員不足スルトキ歩兵ハ他ノ師管其他ノ諸兵ハ他ノ軍管徵兵區ヨリ之ヲ補フ海軍及ヒ近衛ノ諸兵ハ各軍管徵兵區ニ配當シテ全國ヨリ之ヲ徵集ス

第二十六條 抽籤ハ各府縣徵兵區限り之ヲ行フモノトス府縣徵兵區ニ於テハ其區壯丁ノ身體検査終リタル後兵役ニ適ス可キ人員ノ身材職業ニ從ヒ兵種ヲ區別シ番號ヲ定メ抽籤セシム

第二十七條 籤ハ一郡區毎ニ籤丁ノ人撰ヲ以テ一名乃至三名ノ總代人ヲ出シテ之ヲ抽カシム

第二十八條 抽籤ノ法ハ籤丁ノ數ニ應シ籤札ニ兵種番號ヲ記シ籤箱ニ納シ籤簿掛ノ面前ニ置キ籤丁名簿ノ順序ニ從ヒ其氏名ヲ呼ビ總代人ニ之ヲ抽カシメ籤簿掛ハ抽籤ノ正否ヲ監シ抽キ擧クル所ノ番號ヲ高聲ニ呼ハシメ其籤札ヲ受取り籤簿ニ氏名番號ヲ記シ籤札ハ

總代人ニ交付ス

第二十九條 籤ハ其番號現役徵員ノ數ニ滿ツル迄ヲ以テ現役籤トシ其餘ヲ以テ補充籤トス

第五章 補充員及ヒ豫備徵員

第三十條 補充員ハ補充籤ヲ抽キタル者ヲ以テ一個年間之ニ充ツ其期限内現役兵欠員スルトキ又ハ戰時若クハ事變ニ際シ兵員ヲ要スルトキ其番號ノ順序ニ從ヒ之ヲ徵集ス

第三十一條 補充員ニシテ其期限内徵集ノ命ナキ者及ヒ第十八條第三項ノ生徒ニシテ二個年以上ノ課程ヲ卒リタル者ハ年齡滿二十七八歲迄之ヲ第一豫備徵員トス

第三十二條 第十七條ニ當ル者ニシテ其年徵集ノ命ナキ者第十八條第二十二條ニ當ル者ニシテ七個年間其事故ノ存スル者及ヒ第一豫備徵員ヲ終リタル者年齡滿三十二歲迄ハ之ヲ第二豫備徵員トス但

第十七條ニ當ル者第二豫備徵員ト爲リタル後六個年間ニ該條ニ掲クル資格ヲ失ヒタルトキハ現役ニ徵集ス

第三十二條 豫備徵員ハ戰時若クハ事變ニ際シ兵員ヲ要スルトキ之ヲ徵集ス但第二豫備徵員ヲ徵集スルハ後備兵ヲ召集スルトキニ限ル

第六章 雜則

第三十四條 毎年一月ヨリ十二月迄ニ年齡滿十七歳ト爲ル者ハ其年ノ九月一日ヨリ同月十五日迄ニ戸主本人戸主ナレハ自身以下ヨリ戸主トアルモノ皆同シ本人ノ氏名族籍住所誕生ノ年月日及ヒ職業ヲ記載シ本籍ノ戸長ニ届出可シ

第三十五條 毎年一月ヨリ十二月迄ニ年齡滿二十歳ト爲ル者ハ其年ノ九月一日ヨリ同月十五日迄ニ書面ヲ以テ戸主ヨリ本籍ノ戸長ニ届出可シ若シ届出ノ後翌年四月十日迄ニ異動ヲ生シタルトキハ其事由ヲ詳記シ三日以内ニ本籍ノ戸長ニ届出可シ但二十歳未滿ニシ

テ現ニ服役スル者ハ届出ルニ及ハズ

第三十六條 第十七條ニ當ル者其資格ヲ失ヒ第十八條第十九條第二十一條ニ當ル者其事故止ミ及ヒ第三十二條但書ニ當ル異動ヲ生シタルトキハ其事由ヲ詳記シ其年ノ九月一日ヨリ同月十五日迄ニ戸主ヨリ本籍ノ戸長ニ届出可シ但九月十六日以後翌年四月十日以前本條ニ當ル者ハ三日以内ニ本籍ノ戸長ニ届出可シ

第三十七條 他ノ府縣ニ寄留スル者其地ニ於テ徵集ニ應セント欲スルトキハ其地ニ居住スル者戸主ヲ以テ證人ト爲シ八月十五日迄ニ戸主ヨリ其旨ヲ本管廳ニ願出可シ但第三十五條ノ届書ハ寄留地ノ戸長ニ差出ス可シ

第三十八條 現役兵在營在艦中ハ定額ノ日給ヲ與ヘ服食等ヲ給ス

第三十九條 疾病或ハ犯罪等ニテ期限ニ際シ入營シ難キ者ハ其事由ヲ詳記シ其疾病ニ罹ル者ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ即日戸長ニ届出可シ其事故止ムトキ亦同シ

第四十條 第二十九條ニ掲クル者其年九月一日ニ至ルモ事故猶止マサルトキハ之ヲ翌年廻シノ者ト爲シ翌年更ニ検査ヲ遂ケ他ノ徵員ニ先テ徵集ス可シ但戰時若クハ事變ニ際シ兵員ヲ要スルトキハ翌年徵集ノ期ヲ待タズ徵集ス

第四十一條 兵役ヲ免レンカ爲メ身體ヲ毀傷シ疾病ヲ作爲シ其他詐僞ノ所爲ヲ用ヒ又ハ逃亡若クハ潜匿シタル者又ハ正當ノ故ナク検査所ニ參會セス又ハ第三十五條第三十六條ノ届出ヲ怠リタル者ハ抽籤ノ法ヲ用ヒス直ニ現役ニ徵集シ又ハ翌年検査ヲ遂ケ第四十條ニ掲クル者ニ先テ抽籤ノ法ヲ用ヒス徵集ス

第四十二條 常備現役年期ノ計算ハ總テ其入營年ノ四月二十日第四十一條ニ掲クル者ヨリ起算シ豫備役及ヒ後備役年期ノ計算ハ其定例編入ス可キ年ノ四月二十日ヨリ起算ス但禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレ又ハ逃亡シタル者其刑期中ノ日數及ヒ逃亡中ノ日數ハ服役年期ニ算入セズ

第四十三條 第三十四條第三十五條第三十六條第三十九條ノ届出ヲ爲サ、ル者及ヒ検査時日ノ指定ヲ受ケ正當ノ故ナク其場所ニ參會セザル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十四條 兵役ヲ免レンカ爲メ逃亡シ又ハ潜匿シ若クハ身體ヲ毀傷シ疾病ヲ作爲シ其他詐僞ノ所爲アル者ハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第四十五條 本令施行ノ爲メニ要スル規則ハ別ニ布達ヲ以テ之ヲ定ム

軍管師管	國	名
第 第	武藏ノ内	麴町區 神田區 日本橋區 京橋區 芝 區 麻布區 赤坂區 四谷區 牛込區 小石川區 本郷區 下谷區 淺草區 横濱區 荏原郡 南豐島郡 北豐島郡 南足立郡 北足立郡 東多摩郡 西多摩郡 南多摩郡 北多摩郡 久良岐郡 橘樹郡 都筑郡 新坐郡 入間郡 高麗郡 比企郡 横見郡 秩父郡 見玉郡 那珂郡 賀美郡 大里郡 旆羅郡 榛澤郡 相模 甲斐 伊豆 上野 信濃ノ内 南佐久郡 北佐久郡 小縣郡 埴科郡

徵兵令

第 一	更級郡 上高井郡 下高井郡 上水内郡 下水内郡	第 二	武藏ノ内 本所區 深川區 南葛飾郡 北葛飾郡 南埼玉郡 北埼玉郡	第 三	陸前ノ内 仙臺區 名取郡 磐城 岩代 羽前 越後 佐渡 柴田郡	第 四	陸前ノ内 宮城郡 黒川郡 加美郡 志田郡 玉造郡 遠田郡 栗原郡 登米郡 本吉郡 桃生郡 牡鹿郡 氣仙郡	第 五	尾張ノ内 名古屋區 愛知郡 葉栗郡 中島郡 海東郡 海西郡 知多郡	第 六	尾張ノ内 東春日井郡 西春日井郡 丹羽郡 美濃 加賀 能登 越中 飛驒 越前	第 七	攝津ノ内 東區 西區 南區 北區 東成郡 住吉郡 紀伊ノ内 和歌山區 名草郡 海部郡 那賀郡 伊都郡 有田郡
-----	----------------------------	-----	--	-----	---------------------------------------	-----	--	-----	---	-----	--	-----	--

第 七	千島 渡島 後志 石狩 天塩 北見 膽振 日高 十勝 釧路 根室	第 八	安藝 備後 備中 出雲 石見 隱岐 周防 長門	第 九	阿波 讚岐 伊豫 土佐	第 十	肥後 日向 大隅 薩摩 沖繩	第 十一	豐前 豐後 筑前 筑後 肥前 壹岐 對馬	第 十二	日高郡 東牟婁郡 西牟婁郡 山城 大和 河内 和泉 近江 伊賀	第 十三	攝津ノ内 神戸區 西成郡 島上郡 島下郡 豐島郡 能勢郡 八郡郡 菟原郡 武庫郡 川邊郡 有馬郡	第 十四	若狹 丹波 丹後 但馬 美作 備前 因幡 伯耆 播磨 淡路
-----	-------------------------------------	-----	-------------------------	-----	-------------	-----	----------------	------	----------------------	------	------------------------------------	------	--	------	----------------------------------

徵兵令

軍管ハ軍團ノ諸兵師管ハ師團ノ諸兵ヲ徵集ス

徵兵ハ現今沖繩縣ニ之ヲ行ハス北海道ニ於テハ第七軍管ノ鎮臺ヲ設ク
ル迄函館縣管下函館江差福山三個所ヲ限リ之ヲ行ヒ第二軍管ノ管轄ニ
屬セシム

○徵兵事務條例第十七年七月
十八號布達
徵兵事務條例別冊ノ通相定ム

(別冊)

徵兵事務條例目錄

- 第一章 徵兵事務官及ヒ其職掌
- 第二章 徵兵檢査所及ヒ徵兵署
- 第三章 各自届出
- 第四章 下調
- 第五章 徵員配當
- 第六章 檢査準備
- 第七章 檢査
- 第八章 抽籤準備
- 第九章 抽籤
- 第十章 簿冊表面調製
- 第十一章 現役兵編入順序
- 第十二章 新兵入營前ノ扱
- 第十三章 歸休歸省

第十四章 補充員及ヒ豫備徵員

第十五章 一年志願兵

第十六章 臨時徵兵事務

第十七章 雜則

第十八章 附則

徵兵事務條例

第一章 徵兵事務官及ヒ其職掌

第一條 徵兵事務官ハ左ノ如シ

一 鎮臺後備軍司令官

二 營所後備軍司令官

三 府縣駐在官

四 郡區駐在官

五 醫官

六 府知事縣令

七 府縣兵事課長

八 郡區長

第二條 鎮臺後備軍司令官ハ其軍管內徵兵ノ事ヲ掌ル

第三條 營所後備軍司令官ハ其師管內徵兵ノ事ヲ掌リ又毎年新

兵徵集ノ際府縣徵兵署ヲ巡行シ兵種ノ撰定簿冊ノ審査兵役免

除ノ處分ヲ爲シ徵集猶豫ニ係ル者ハ府知事縣令ト商議シ之ヲ

裁決ス但鎮臺所在地ニハ營所後備軍司令官ヲ置カサルヲ以テ

鎮臺後備軍司令官其職掌ヲ兼攝スルモノトス

第四條 府縣駐在官ハ其府縣内徴兵ノ事ヲ掌リ又毎年新兵徴集ノ際醫官及ヒ府縣兵事課長ト共ニ徴兵検査所ヲ巡行シ壯丁検査ノ事ヲ掌ル

第五條 郡區駐在官ハ其郡區内徴兵ノ事ヲ掌リ又毎年新兵徴集ノ際名簿調査ノ事ヲ掌ル

第六條 醫官ハ毎年新兵徴集ノ際一等軍醫以下軍醫試補以上ヲ以テ之ニ充ツ

一等軍醫ハ後備軍司令官ニ從ヒ府縣徴兵署ヲ巡行シ壯丁ノ身材骨格兵役ニ適スルヤ否ヲ検査スルコトヲ掌ル

二等軍醫以下軍醫試補以上ハ府縣駐在官ト共ニ徴兵検査所ヲ巡行ス其職掌一等軍醫ニ同シ

第七條 毎年新兵徴集ノ際前諸條官員ノ外海軍將校ヲシテ後備軍司令官ノ事務ニ參セシムルコトアル可シ

第八條 府知事縣令ハ管内徴兵ノ事ヲ掌リ又毎年新兵徴集ノ際府縣徴兵署ニ於テ後備軍司令官ト商議シ徴集猶豫ノ裁決ヲ掌ル

第九條 府縣兵事課長ハ其府縣内徴兵ノ事務ヲ整理シ又毎年新兵徴集ノ際府縣駐在官ト共ニ徴兵検査所ヲ巡行シ検査ノ事務ヲ補助ス

第十條 郡區長ハ郡區内徴兵ノ事ヲ掌リ又毎年新兵徴集ノ際名簿調査ノ事ヲ掌ル

第十一條 毎年新兵徴集ノ際師管徴兵區ノ諸記録ハ後備軍司令

部書記ヲシテ之ヲ掌ラシム

検査及ヒ抽籤ノ筆記ハ筆生ヲシテ之ヲ掌ラシメ身體検査ノ記録ハ地方醫員ヲシテ之ヲ掌ラシメ又身體検査ノ補助ヲ爲サシムルコトアル可シ

醫員筆生ハ府知事縣令ノ撰キ以テ命スルモノトス

第十二條 徴集猶豫ノ事ニ係リ後備軍司令官ト府知事縣令ト商議整ハサルトキハ各其事由ヲ具シ陸軍卿ニ伺出可シ但後備軍司令官ハ其所管長官ヲ經由ス可シ

第二章 徴兵検査所及ヒ徴兵署

第十三條 壯丁ノ検査ヲ施行スル爲メ府縣管地ノ廣狹及ヒ壯丁ノ多寡ニ應ジ集合便宜ノ地ヲ撰ミ若干ノ徴兵検査所ヲ設ク可シ

第十四條 各府縣徴兵區ニ於テ其事務ヲ整理スル爲メ毎年新兵徴集ノ期ニ先テ府縣廳所在ノ地又ハ管内便宜ノ地ニ一ノ徴兵署ヲ設ク可シ但一府縣ノ管地兩師管ニ分屬スルモノハ毎師管ニ一ノ徴兵署ヲ設ク可シ

第十五條 徴兵検査所及ヒ徴兵署ハ毎年新兵徴集中開クモノニシテ該事務竣レハ之ヲ閉ツヘシ

第三章 各自届出

第十六條 徴兵令第三十四條ノ届書ハ第一書式第三十五條ノ届書ハ第二書式第三十六條ノ届書ハ第三書式ニ據リ之ヲ認メ戶長ニ差出ス可シ但第三十五條ノ届書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

一 徵兵令第七條ニ當ル者ハ刑名宣告書寫
 二 徵兵令第十七條第一項第二項ニ當ル者ハ事由ヲ記シタル詳細書第三項第五項ニ當ル者ハ第四書式ノ事由書及ヒ戶籍寫第四項並ニ同令第二十二條ノ諸項ニ當ル瘵疾不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサル爲メ徵集猶豫ニ關スル者ハ事由ヲ記シタル詳細書及ヒ第五書式ノ醫師診斷書並ニ同郡區内現役兵ノ戶主タル者二人以上ノ保證書及ヒ戶籍寫重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ刑名宣告書寫
 三 徵兵令第十八條第一項ニ當ル者ハ辭令書寫第二項ニ當ル者ハ卒業證書寫及ヒ辭令書寫第三項第四項ニ當ル者ハ學校長若シハ所屬長ノ證明書第七項ニ當ル者ハ地名校名及ヒ修業ノ學科並ニ入校ノ年月日等記載ノ書及ヒ公使又ハ領事ノ證明書第八項ニ當ル者ハ檢察官ノ證明書第九項ニ當ル者ハ刑名宣告書寫
 四 徵兵令第十九條ニ當ル者ハ學科並ニ等級ヲ記シタル學校長又ハ所屬長ノ證明書
 五 徵兵令第二十一條ニ當ル者ハ決裁書ノ寫
 第十七條 各自届出ヲ爲スニ當リ戶主旅行又ハ外國寄留等ニテ届出ヲ爲ス能ハサルトキハ本人又ハ親族ノ者ヨリ届出可シ
 第十八條 各自届出ヲ終ルノ後抽籤ノ前他ノ府縣ニ轉籍スル者ハ三日以内ニ舊住地新住地雙方ノ戶長ニ届出可シ

第四章 下調

第十九條 毎年九月一日以前戶長ハ各自届出ヲ爲ス可キ者ヲシテ徵兵令第三十四條第三十五條第三十六條ノ届出ヲ怠ラシメサル様注意ス可シ
 第二十條 戶長届書ヲ領收セハ其町村ノ戶籍ニ照シ届渡ノ者ナキヤ否ヲ調査シ國民兵入籍者ト徵兵相當者トヲ分テ徵兵相當者ノ各自姓名ノ頭ニ記載シタル箇條並ニ事由書或ハ證書等相違ナキヤ否ヲ審査シ其届書ニ署名押印シ更ニ徵兵令第七條第十七條第十八條第十九條第二十一條ニ當ル者ト檢査ヲ受ク可キ者トハ區別シ國民兵入籍者ノ届書ト共ニ書類目錄ヲ添ヘ毎年九月二十五日迄ニ郡區長ニ差出ス可シ但徵兵令第三十五條但書ニ當ル者ハ戶長之ヲ調査シ其族職業氏名住所誕生年月日及ヒ隊號ヲ記シ本條ノ書類ト共ニ郡區長ニ差出ス可シ
 第二十一條 戶長ハ檢査ヲ受ク可キ者ノ戶籍ニ基キ人別表及ニ二葉ヲ製シ各自届書ト共ニ郡區長ニ差出ス可シ但人別表用紙ハ各自届出ノ季節ニ先チ府縣應ヨリ之ヲ下付ス可シ
 第二十二條 各自届出ノ後身上ノ異動ヲ届出ルトキハ戶長之ヲ調査シ三日以内ニ郡區長ニ差出ス可シ
 第二十三條 郡區長ハ戶長ヨリ差出ス所ノ各自届書人別表其他諸書類ノ成規ニ適スルヤ否ヲ點檢シ然ル後壯丁名簿及ヒ壯丁異動名簿ハ製シ卷末ニ署名押印シ各自届書人別表其他諸書類ト共ニ十月十五日迄ニ之ヲ郡區駐在官ニ送致ス可シ

第二十四條 郡區駐在官ハ郡區長ヨリ送致スル所ノ名簿並ニ諸書類ヲ點檢シ其郡區内ノ壯丁中遺漏或ハ差違ナキヤ否ヲ調査シ又人別表備考區畫ニ記載スル件々ノ適否ヲ覈査シ訂正加書シ然ル後名簿ノ卷末ニ署名押印シ諸書類ト共ニ郡區長ニ返付ス可シ

第二十五條 郡區長ハ郡區駐在官ヨリ返付スル所ノ名簿ニ各自屆書人別表其他諸書類ヲ添ヘ十月二十五日迄ニ之ヲ府縣廳ニ差出ス可シ

第二十六條 壯丁名簿調製ノ際郡區長ハ人別表備考區畫ニ記載スル件々ノ適否ヲ覈査シ訂正加書ス可シ

第二十七條 寄留地ニ於テ徵集ニ應シ又ハ檢査ヲ受ケント欲スル者ハ該部内ノ者ト混セサル爲メ他府縣ヨリ寄留ノ部ト題シ本籍地ニ於テハ他府縣ニ寄留ノ部ト題シ之ヲ別簿ニ作ル可シ

第二十八條 郡區長ハ壯丁名簿壯丁異動名簿整頓前第二十二條ニ據リ身上ノ異動屆書ヲ戶長ヨリ差出ストキハ之ヲ調査シ名簿ヲ訂正ス可シ若シ名簿整頓後ニ係ルトキハ府縣廳又ハ徵兵署或ハ檢査所ニ送ル可シ但徵兵令第三十四條ノ各自届出後身上異動ノ屆書ハ三日以内ニ府縣廳ニ差出ス可シ

第二十九條 他府縣ニ籍ヲ轉スルノ異動屆書ハ郡區長ヨリ府縣廳ニ差出シ該廳ヨリ新住地府縣廳ニ通牒ス可シ

第三十條 郡區長ハ壯丁名簿壯丁異動名簿等ヲ府縣廳ニ差出シタル後國民兵入籍者ノ屆書ニ據リ國民兵名簿式ヲ調製シ卷

末ニ署名押印シ各自届書ト共ニ十月三十日迄ニ之ヲ郡區駐在官ニ送致ス可シ

第三十一條 郡區駐在官ハ郡區長ヨリ送致スル所ノ名簿ヲ點檢シ其郡區内ノ國民兵入籍者ノ遺漏或ハ差違ナキヤ否ヲ調査シ然ル後卷末ニ署名押印シ郡區長ニ返付シ郡區長ハ各自届書ト共ニ十一月十日迄ニ之ヲ府縣廳ニ差出ス可シ

第五章 徵員配當

第三十二條 毎年徵集ス可キ陸軍新兵ノ員數ハ陸軍卿之ヲ告示シ海軍新兵ノ員數ハ海軍卿之ヲ告示ス可シ

第三十三條 鎮臺司令官ハ其告示ニ基キ後備軍司令官ヨリ差出ス所ノ人員ヲ率トシ軍管徵集人員配當表式ヲ作リ之ヲ陸軍省ニ開申シ又管内府縣廳及ヒ府縣駐在官ニ通牒ス可シ府縣廳ニ於テハ之ヲ管内ニ告示ス可シ

第六章 檢査準備

第三十四條 府縣廳ニ於テハ毎年十一月一日ヨリ徵兵署ヲ開設シ府縣駐在官醫官府縣兵事課長地方醫員及ヒ筆生出頭シ徵兵檢査ノ準備ヲ爲ス可シ

第三十五條 府縣廳ニ於テハ各自届書人別表其他諸書類ノ成規ニ適スルヤ否ヲ審査シ戶籍帳ト照較シ遺漏又ハ差違ナキヤ否ヲ調査シ然ル後徵兵署ニ送致ス可シ

第三十六條 府縣駐在官ハ府縣廳ヨリ徵兵署ニ送ル所ノ諸書類ノ成規ニ適スルヤ否ヲ調査シ又壯丁名簿壯丁異動名簿中徵集

〇應ス可キ者ノ總人員ヲ營所後備軍司令官ニ差出ス可シ但營所後備軍司令官ハ之ヲ一師管ニ取廻メ鎮臺後備軍司令官ヲ經テ鎮臺司令官ニ呈ス可シ
 第三十七條 府縣駐在官ハ前條書類調査ノ後府縣兵事課長ト商議シ管地ノ廣狹及ヒ壯丁ノ多寡ニ應シ檢査所並ニ巡回日割ヲ定メ其表面式第十一ヲ製シ後備軍司令官ヲ經テ鎮臺司令官ニ府縣兵事課長ハ府知事縣令ニ之ヲ開中ス可シ
 第三十八條 檢査所並ニ巡回ノ日割已ニ定マルトキハ府縣廳ヨリ郡區長及ヒ戶長ニ達シ戶長ハ之ヲ其町村內檢査ヲ受ク可キ者ニ達シ置キ徵集ノ日時ニ至レハ壯丁ヲ引廻メ指定ノ場所ニ出頭ス可シ
 第三十九條 府縣兵事課長ハ徵兵署ニ於テ筆生ヲシテ人別表ニ基キ檢査表^{第十式}ニ製セシメ檢査ノ席ニ備ヘ置ク可シ但檢査表用紙ハ檢査ノ季節ニ先チ府縣廳ヨリ之ヲ徵兵署ニ送ル可シ
 第四十條 壯丁中疾病處刑又ハ逃亡失踪等ニテ檢査所ニ出頭セサル者アルトキハ戶主或ハ親族ノ者ヨリ逃亡失踪等ノ者ハ其事由書ニ戶長ノ與書證印憲兵部若クハ警察署ノ證認ヲ受ケ疾病ノ者ハ醫師ノ診斷書^{第五式}處刑中ノ者ハ刑名宣告書寫ヲ以テ郡區長ヲ經テ徵兵檢査所ニ届出可シ但起居自在ナラサル疾患ニシテ車駕等ヲ用フルモ出頭スル能ハサル者ハ其家ニ就キ之ヲ檢査シ若シハ他ノ檢査所ニ出頭セシムル等府縣駐在官府縣兵事課長商議シテ之ヲ處分スヘシ

第四十一條 徵兵檢査所ニ於テ領收スル所ノ諸願屆書ハ府縣駐在官府縣兵事課長ト商議シ之ヲ處分シ壯丁名簿壯丁異動名簿ニ訂正ヲ加ヘ若シ處分スルコト能ハサルモノ或ハ成規外ニ係ルモノハ意見書ヲ添ヘ之ヲ巡行ノ後備軍司令官ニ差出ス可シ
 第七章 檢査

第四十二條 檢査ハ概ネ十一月十日ヨリ始メ第三十四條ニ揭クル所ノ諸員徵兵檢査所ヲ巡行シ其事務ヲ調理ス
 第四十三條 戶長ヨリ檢査ノ違ヲ受ケタル者ハ戶長ニ從ヒ指定ノ日時ニ其場所ニ出頭シ府縣駐在官府縣兵事課長ノ面前ニ於テ身體ノ檢査ヲ受ク可シ
 第四十四條 身體檢査ヲ爲ストキハ郡區駐在官郡區長列席シ郡區駐在官ハ壯丁名簿壯丁異動名簿中徵集ノ部ニ記載シタル順序ニ壯丁ヲ呼出シ醫官ハ徵兵檢査規則ニ據リ體格ヲ檢査シ合格ノ者ハ更ニ其體格ノ等位ヲ區別ス不合格ノ者及ヒ身幹四尺九寸未滿ノ者ハ地方醫員ヲシテ之ヲ檢査表ニ記註セシメ醫官之ニ捺印シテ府縣駐在官ニ差出ス可シ但四尺九寸未滿ノ者及ヒ不合格者ノ骨相ハ檢査表ニ記註スルヲ要セス唯其尺度並ニ骨相ノ部ニ主任ノ醫員捺印ス可シ

第四十五條 壯丁ノ身體檢査終ル毎ニ府縣駐在官ハ府縣兵事課長ト共ニ人別表ニ據リ本人ニ姓名住所族職業父兄ノ姓名等相違ナキヤ否ヲ尋問ス可シ
 第四十六條 人別表調査ノ後府縣駐在官ハ檢査表ニ據リ筆生ヲ

シテ人別表中身幹尺度ノ區畫ニ各自ノ寸尺ヲ記述セシメ又疾病缺損又ハ身幹四尺九寸未満ノ者ノ備考區畫ニハ何ノ事故ニ付徵集猶豫疾病缺損ニ付除役等其要領ヲ記述セシム可シ

第四十七條 壯丁中癩癩狂病白痴夜盲聾啞遺尿等ノ如キ疾病アリ其狀ヲ申告セントスル者ハ平素其病狀ヲ熟知スル近隣ノ戸主二人以上ノ證書ヲ添テ検査所ニ申出可シ醫官ニ於テ相違ナシト認定スルトキハ之ニ與證書印ス可シ若シ認定スルトコト能ハサルトキハ府縣駐在官ニ致ス可シ駐在官ハ之ヲ徵集ノ部ニ加フ可シ

第四十八條 壯丁ノ身體検査終ル毎ニ府縣駐在官ハ府縣兵事課長ト共ニ合格又ハ不合格或ハ徵集猶豫ノ要領ヲ壯丁名簿壯丁異動名簿中ノ各自姓名ノ頭ニ記述ス可シ

第四十九條 身體検査終リタル後郡區長ハ合格者ヲシテ抽籤總代人ヲ撰ハシメ其姓名住所ヲ府縣兵事課長ニ通牒ス可シ

第五十條 府縣駐在官ハ人別表備考區畫ヲ案シ訂正ヲ加フ可キモノハ之ヲ加ヘ醫官ニ謀リ身體最モ健全ニシテ近衛兵ニ適當スル思考スルモノハ人別表備考區畫ニ近衛何兵適當ノ文字ヲ記述ス可シ

第五十一條 府縣駐在官ハ壯丁ノ職業ニ注意シ海軍兵ニ適當スル思考スルモノハ人別表備考區畫ニ海軍何兵適當ノ文字ヲ記述ス可シ

第五十二條 府縣駐在官ハ合格者ヲ人別表及區検査表ニ照シ各

自ノ身材藝能職業ニ應シ豫メ兵種ヲ區別ス可シ

第五十三條 近衛諸兵ハ總テ品行方正ニシテ且體格最健全ナル者ヨリ之ヲ撰フ可シ其身幹砲兵ハ五尺五寸以上歩兵砲兵工兵ハ五尺三寸以上ノ者タル可シ

第五十四條 鎮臺ニ屬スル諸兵ノ身幹砲兵ハ五尺五寸以上歩兵砲兵工兵輜重兵ハ五尺三寸以上ノ者タル可シ若シ不足スルトキハ砲兵ハ五尺四寸以上歩兵砲兵工兵輜重兵ハ五尺二寸以上ノ者ヲ以テ之ニ充テ仍ホ不足スルトキハ臨時其定尺ヲ減スルコトアル可シ

第五十五條 陸軍雜卒又ハ職工トシテ徵集スル者ハ身幹五尺以上ニシテ雜卒又ハ職工ノ勤務ニ適當ノ者ヨリ之ヲ撰フ可シト雖モ若シ所要ノ人員不足スルトキハ其體格五種兵ニ亞ク者又ハ身幹四尺九寸以上ニシテ各其勤務ニ堪フ可キ者ヨリ之ヲ撰フ可シ

第五十六條 海軍兵ハ左ニ掲グル項目ノ順序ニ從ヒ之ヲ撰フ可シ其身幹水兵火夫ハ五尺以上ヲ定尺トス

第一項 航海學又ハ機關學卒業ノ者

第二項 西洋形船舶ニ乗組ノ者

第三項 瀛車或ハ諸製造所等ニ於テ機關手又ハ火夫ノ業ニ從事スル者

第四項 現ニ前諸項ノ職業ニ從事セスト雖モ一箇年以上營

第五項 日本形五百石以上ノ船舶ニ乗組ノ者
 第六項 日本形五百石未滿ノ船舶ニ乗組ノ者
 第五十七條 海軍職工トシテ徵集スル者ハ身幹四尺九寸以上ニシテ其勤務ニ適當ノ者ヨリ之ヲ撰ブ可シ
 第五十八條 兵種ノ區別已ニ竣レハ府縣駐在官ハ府縣兵事課長ト共ニ壯丁名簿壯丁異動名簿八別表檢査表其他一切ノ書類ヲ取總メ巡行ノ後備軍司令官ニ差出ス可シ
 第八章 抽籤準備
 第五十九條 營所後備軍司令官ハ府縣駐在官ノ報告ニ據リ一府縣ノ徵兵檢査事務完了ノ日時ヲ量リ巡回日割表ヲ作リ
 鎮臺後備軍司令官ヲ經テ之ヲ鎮臺司令官ニ開申シ又其巡行ス可キ府縣廳及ニ府縣駐在官ニ通牒ス可シ
 第六十條 府縣廳ニ於テハ後備軍司令官ノ通牒ニ據リ其日時場所ヲ抽籤總代人ニ達シ出頭セシム可シ
 第六十一條 抽籤施行ニ先チ府縣兵事課長ハ徵兵署ニ於テ筆生ヲシテ籤丁名簿及ニ籤札ヲ調製セシメ抽籤ノ席ニ備ヘ置キ又其府縣籤丁ノ總員及ニ各兵種現役補充ノ徵員ヲ記載セシメ之ヲ抽籤場所ニ揭示ス可シ
 第六十二條 籤丁名簿ハ籤丁ノ姓名住所ヲ記シ又籤札ハ左式ノ如ク厚紙ヲ凡ソ方三寸ニ切リ之ヲ四ツ折ニシテ中分ヲ粘合格者ハ數ニ應ジ調製ス可シ
 第六十三條 籤札書式略之

第六十三條 後備軍司令官ハ府縣巡行期日ニ至レハ徵兵署ヲ巡行シ壯丁名簿壯丁異動名簿其他諸書類ノ成規ニ適スルヤ否ヲ審査ノ上檢印シ又徵集猶豫ニ關スル書類ハ府知事縣令ト商議シ成規ニ照シテ之ヲ處分ス可シ
 第六十四條 後備軍司令官ハ抽籤施行ニ先チ徵兵令第四十一條ニ當リ先入兵同令第四十條ニ當リ入營延期ノ者及ヒ同令第十條ニ當リ志願兵ヲ調査シ現役兵編入ノ順序ニ從ヒ現役番號ヲ附ス可シ
 第九章 抽籤
 第六十五條 抽籤ハ後備軍司令官府知事縣令府縣駐在官府縣兵事課長郡區長及ニ郡區駐在官列席シ徵集人員配當表ニ基キ近衛諸兵鎮臺諸兵及ニ海軍諸兵ヲ區別シ雜卒職工亦其種類ヲ分テ之ヲ行フ可シ
 第六十六條 抽籤總代人ハ抽キタル籤ヲ確證スル爲メ籤簿掛ハ其籤ヲ總代人ヨリ領收シ籤丁名簿姓名ノ頭ニ貼付シ徵兵署ノ割印ヲ押シ然レ後總代人ニ返付ス可シ
 第六十七條 抽籤施行ノ際後備軍司令官ハ書記ヲシテ八別表ニ番號ヲ記入シ又籤簿式ニ調製セシム可シ
 籤簿ハ兵種ヲ分テ當籤番號ノ順序ヲ以テ登記シ卷末ニ籤簿掛署名押印ス可シ但籤簿ハ別ニ一部ヲ作リ府縣廳ニ備ヘ置ク可シ
 第六十八條 抽籤施行ノ後徵兵署ニ於テ八別表ニ據リ番號割

第一項 徵兵令第四十一條ニ當ル者
 第二項 徵兵令第四十條ニ當ル者
 第三項 徵兵令第十條ニ當ル者
 第四項 現役當籤ノ者
 第五項 補充當籤ノ者
 第六項 歩兵ニ在テハ師管徵兵區内其他ハ軍管徵兵區内ニ平
 第七十五條 歩兵ノ補充員不足ハ師管徵兵區内ニ於テ現役兵ヲ
 充實スル能ハサルトキハ營所後備軍司令官ハ鎮臺後備軍司令
 官ヲ經テ鎮臺司令官ニ上申シ鎮臺司令官ハ他ノ師管ヨリ之ヲ
 充實シ又他兵ノ補充員不足ハ軍管内ニ於テ現役兵ヲ充實スル
 能ハサルトキハ鎮臺司令官ヨリ之ヲ陸軍省ニ開申スヘシ
 第七十六條 現役當籤ニ當リタル者ハ入營ノ命ヲ待ツモノナルカ
 故五日間ニ往復スル能ハサル地ニ出ルヲ許サズ
 第七十七條 新兵ハ概テ毎年四月二十日ヨリ五月二十日迄ニ入

第七十八條 新兵入營ノ日時及ビ場所ハ毎年近衛局鎮臺又ハ鎮
 守府ニ於テ府縣廳ニ通牒シ府縣廳ハ速ニ其旨ヲ入營ス可キ者ニ
 達セシメ左ノ手續ヲ爲ス可キ者ニ
 一 鎮臺兵ハ其員數及ビ入營地ニ應シ最寄テ分チ所要ノ附
 二 近衛兵及ビ海軍兵ハ一府縣ニ一人若クハ二人ノ附添人
 第七十九條 新兵入營地迄ハ旅費並ニ附添人ノ旅費ハ定則ニ照
 準シ大藏省ヨリ支給ス可キ者ニ
 第八十條 新兵入營ノ期ニ臨ミ父母ノ重病或ハ死没等ノ故ヲ以
 テ入營延期ヲ願フ者ハ戶主又ハ親族ノ者ヨリ事實ヲ詳記シ其
 重病ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ戶長郡區長與書證印ヲ郡區駐
 在官ヲ經テ府縣駐在官ニ願出ルニ於テハ詮議ノ上十四日以内
 ノ延期ヲ許ス可キ者ニ
 第八十一條 前條ノ延期ヲ許可セシメタル府縣駐在官ハ其旨ヲ
 近衛局鎮守府又ハ入營地ノ後備軍司令官ニ通牒ス可キ者ニ
 第八十二條 入營延期ノ許可ヲ得タル者期滿ツレハ即日戶長ニ
 届出戶長ハ直ニ出發セシメ其旨ヲ近衛局鎮守府又ハ入營地ノ
 後備軍司令官ニ届出可キ者ニ
 第八十三條 新兵入營ノ期ニ臨ミ其身疾病犯罪等ニテ入營ノ難
 旨戶長ニ届出シテ戶長與書證印ヲ郡區長ヲ經テ近衛局

鎮守府又入營地後備軍司令部屆出可其事故止其亦同之尤疾病延引計五日以上及之者最初屆出之日三十日毎屆出其年九月一日至九月十五日限以郡區長之經府縣本人所持之番號割符ヲ添之同月十五日限以郡區長之經府縣應之差出之府縣廳ヨリ之徵兵署ニ送ル可之

第八十四條 新兵入營前甲府縣ヨリ乙府縣ニ轉籍又全戶寄留スル者即日戶主ヨリ甲府縣戶長ニ届出戶長郡區長ヲ經テ府縣廳ニ届出可之又乙府縣ニ到着スルトキハ前同様ノ手續ヲ以テ番號割符ヲ添之届出可之然ルトキハ甲府縣ノ當籤番號ヲ存シ他日入營ノ時ニ至リ乙府縣同番號ノ者ニ次テ入營セシム可之但本人ヨリ轉籍又全戶寄留ノ旨ヲ甲乙府縣ノ郡區駐在官ニ届出可之

第十三章 歸休歸省

第八十五條 徵兵令第十七條ニ照シテ徵集ヲ猶豫スルハ抽籤以前該條項ニ當ル者ニ限ル但戶主若クハ父兄等死没シ又ハ重罪ノ刑ニ處セラレ或ハ痲疾不具等トナリ本人ヲ要スルニアラスレハ一家ノ生計ヲ營フコト能ハサルトキハ詮議ノ上郷里ニ歸休セシメ又ハ第一豫備徵員ニ編入ス

抽籤後養子又ハ他家ニ相續人トナリ前項ノ事故ヲ生スルモ詮議ニ及ハス

第八十六條 前條但書ニ當ル者ハ戶主又ハ親族ノ者ヨリ其事由ヲ詳記シ戶籍寫若クハ刑名宣告書寫若クハ醫師診斷書式並

同郡區内現役兵ノ戶主タル者二人以上夫ノ事實ヲ證セシメ戶長郡區長與書證印ノ上郡區駐在官ヲ經テ府縣駐在官ニ差出シ該官ハ後備軍司令官ヲ經テ近衛局鐵臺或ハ鎮守府ニ申牒シ近衛局鐵臺ハ陸軍省ニ鎮守府ハ海軍省ニ開申ス可之但痲疾不具等ノ者ハ陸海軍醫官ヲシテ地方醫師診斷書ノ當否ヲ判定セシメ又ハ府縣駐在官及ヒ其地陸海軍醫官ヲシテ其家ニ就キ檢査セシムルコトアル可シ

第八十七條 前條ノ者生兵或ハ二等若水兵若クハ二等若火夫ノ卒業後ナレハ郷里ニ歸休セシメ又卒業以前ナレハ之ヲ第一豫備徵員ニ編入ス

第八十八條 近衛兵ニシテ前條ニ據リ歸休セシメ又ハ第一豫備徵員ニ編入スル者ハ近衛局ヨリ本籍所管ノ鐵臺ニ通牒シ該鐵臺ノ管理ニ屬ス可シ

第八十九條 現役兵在營在艦中父母ノ重病或ハ死亡等ニテ歸省ヲ願フトキ其戶主又ハ親族ノ者ヨリ事實ヲ詳記シ其重病ハ醫師ノ診斷書式ヲ添ヘ戶長郡區長ノ與書證印ヲ以テ直ニ本人所屬ノ隊或ハ鎮守府ニ願出ルル於テハ詮議ノ上往復ヲ除キ十四日以内ニ歸省ヲ許ス可シ尤モ旅費ハ自辨アル可シ但生兵二等若水兵二等若火夫ノ卒業ニ至ラス或ハ臨時ニ演習觀兵ノ舉アルトキ又ハ航海中ハ本條ノ限ニ在ラス

第十四章 補充員及豫備徵員

第九十條 補充員ハ臨時補充缺ヲ除ク外鐵臺ニ於テ毎年九月ニ

日ノ現役兵缺員ニ應ジ概テ十月二十日ヨリ同月三十日迄ニ入營スルモノトス但近衛兵海軍兵ニ在テハ近衛局海軍省ヨリ所要ノ人員ヲ九月二十日迄ニ陸軍省ニ通牒シ陸軍省ハ之ヲ各軍管ニ賦課ス可シ

第九十二條 補充員入營ノ期ニ臨ミ疾病又ハ犯罪等ヲテ入營スル能ハサル者ハ其實情ヲ詳記シ本人所持ノ番號割符ヲ添ヘ疾
病ハ醫師ノ診斷書^{第五}ヲ添ヘ速ニ戶長ニ届出可シ戶長ハ與書
證印シ郡區長ヲ經テ府縣廳ニ差出ス可シ該廳ニ於テハ其次番
號ノ者ヨリ順次ニ繰上ケ徵集人員ヲ充實シ入營セシメ其旨ヲ
府縣駐在官ニ通牒ス可シ

第九十三條 前條ノ事故ニ據リ入營セサル者ハ翌年徵集ノ期ニ當リ郡區長ニ於テ其名簿ヲ作り府縣廳ニ差出シ府縣廳ヨリ之ヲ徵兵署ニ送ル可シ

第九十四條 補充員ニシテ入營ヲ命ゼラレタル者其入營迄ノ扱
ハ總テ現役當籤者入營前ノ扱ト異ナルコトナシ

第九十五條 補充員ハ十日間ニ往復スルコト能ハサル地ニ出ル
ニ出テ然レトモ已ニ得テル事故ヲ生シ其日限ヲ越スル地
ノ與書證印ヲ受ケ郡區駐在官ニ出願ス可シ

第九十六條 補充員ニシテ現役ヲ志願スル者ハ本人ノ願書ニ親
族連署シ戶長郡區長ノ與書證印ヲ受ケ郡區駐在官ニ願出ル
ニ出テ該廳ニ上當籤番號ノ順序ニ拘ハラズ補充員徵集同時之ヲ

入營セシム可シ

第九十六條 補充員身上ニ異動ヲ生スルトモハ戶主又ハ親族ノ
者ヨリ三日以内ニ戶長ニ届出戶長郡區長與書證印シ郡區駐在
官ヲ經テ之ヲ府縣駐在官ニ届出可シ

第九十七條 補充員ニシテ甲府縣ヨリ乙府縣ニ轉籍又ハ全戶寄
留スル者ハ第八十四條ノ例ニ據ル可シ

第九十八條 補充員ニシテ第八十五條但書ニ當ル事故ヲ生シ徵
集猶豫ヲ出願スル者ハ第八十六條ノ手續ニ據リ主務省ニ開申
ス可シ但主務省ニ於テハ詮議ノ上第一豫備徵員ニ編入ス可シ

第九十九條 第一豫備徵員身上ニ異動ヲ生スルトモハ戶主又ハ
親族ノ者ヨリ三日以内ニ戶長ニ届出戶長郡區長ノ例ニ
據リ之ヲ府縣駐在官ニ届出可シ

第一百條 第一豫備徵員ニシテ十五日間ニ往復スルコト能ハサル
地ニ旅行セシムコト欲スル者ハ其往先ヲ詳記シ戶長郡區長ヲ經テ
郡區駐在官ニ届出テ然レ後旅行ス可シ但其屆書ニハ旅行中徵
集ノ命アルトモ直ニ之ヲ通牒ス可キ者ノ姓名住所ヲ記入ス
可シ

第一百一條 徵兵令第三十二條ニ據リ第二豫備徵員トナル者ハ其
年四月三十日ヨリ至シハ別ニ命ナクシテ第二豫備徵員ニ編入セ
ラレタル者ハ必得可シ

第一百二條 國民兵役徵集編入シテ之ヲ受テ者同必得可シ

第二百三條 補充員服役年數計算ハ現役兵ト同ク四月二十日ヨリ起算スルニ豫備徵員服役年數計算ハ其編入ス可キ年ノ四月二十日ヨリ起算ス可シ但第八十七條ニ當リ第一豫備徵員トナル者ハ其入營年四月二十日ヨリ起算スルニ依リテ計算スルニ依リテ
 第十五章 一年志願兵
 第二百三條 徵兵令第十一條ニ據リ一箇年間現役ニ服セシコトヲ志願スル者ハ毎年九月一日ヨリ同月十五日迄ニ其願書ニ書キテ戶長ニ差出ス可シ戶長ハ之ニ與齊證印シ郡區長ヲ經テ十月一日限リ府縣廳ニ差出シ府縣廳ヨリ之ヲ徵兵署ニ送ル可シ
 第二百四條 志願者ハ當分ノ内各自ノ志望ニ由リ步兵看護卒及ヒ看馬卒ノ内ニ就キ其種類ヲ撰ビ出願スルコトヲ得
 第二百五條 食料被服等ノ自辨金ハ一名金壹百圓ニシテ其現品ハ官ヨリ之ヲ支給ス但自辨金ハ二月一日迄ニ府縣廳ヲ經テ鎮臺ニ納ム可シ
 徵兵令第十一條第二項ニ據リ若干月ニシテ歸休ヲ命ジタル者ニハ殘金ヲ返付ス可シ
 第二百六條 志願兵入營前ノ扱ハ總テ現役當籤者ト異ナルコトナシ
 入營後第八十五條但書ニ當ル事故ヲ生セシトキハ第八十六條及ヒ第八十七條ヲ適用ス可シ
 第二百七條 步兵志願者ハ各軍管區ニテ總テ別段ニ教育ヲ受ケシテ看護卒看馬卒志願者ハ各軍管ノ其部ニ屬シ教育ヲ受ケシム

可シ
 第二百八條 志願兵現役一箇年ヲ終レハ六箇年間豫備役ニ服ス可シ
 第二百九條 志願兵中品行方正勤務勉勵ニシテ技藝ニ熟達シ下士ノ任ニ堪フ可キ者ニハ其適任證書ヲ付與ス可シ
 又教育上拔群ノ結果ヲ得タル者ハ豫備役下士ニ任シ士官適任證書ヲ付與ス可シ
 第二百十條 志願兵檢査所往復及ヒ入營歸郷ノ旅費ハ總テ自辨ス
 第十六章 臨時徵兵事務
 第二百十一條 戰時若クハ事變ニ際シ兵員ヲ要スルトキハ左ニ掲ケル項目ノ順序ニ從ヒ徵集ス可シ
 一 徵兵令第四十條ノ事故止ミタル者
 二 補充員
 三 第一豫備徵員
 四 徵兵令第十七條ニ當リ徵集ヲ猶豫セシ者
 五 第二豫備徵員
 第二百十二條 豫備徵員ハ年次ヲ逐ヒ服役日尙淺キ者ヨリ當籤番號ノ順序ニ從ヒ之ヲ徵集シ又徵兵令第十七條ニ當リ徵集ヲ猶豫セシ者ハ項目及ヒ當籤番號ノ順序ニ從ヒ之ヲ徵集ス
 第二百十三條 第二百十一條第二項第三項ニ掲ケル者ヲ徵集スルハ手續ハ平常補充員ヲ徵集スルニ同シ

第百十四條 府縣廳於臨時徵兵署ヲ設ケ徵集ノ準備ヲ爲ス可シ
 第百十五條 臨時徵兵署ニ於テハ檢査所並ニ巡回日割ヲ定メ後備軍司令官及ヒ府知事縣令ニ開申ス可シ但府縣廳ニ於テハ戶長ヲシテ壯丁ヲ引纏メ指定ノ日時場所ニ出頭セシム可シ
 第百十六條 檢査所巡行ノ諸員ハ府縣駐在官醫官府縣兵事課長地方醫員及ヒ筆生トス但郡區長郡區駐在官ハ檢査所ニ出頭シ同所ノ事務ヲ補助ス可シ
 第百十七條 身體檢査竣ルノ後府縣駐在官ハ臨時徵兵署ニ於テ府知事縣令ト商議シ徵兵令第十七條ニ當ル者ハ各項目ニ番號ヲ分テ第二豫備徵員ハ各年度ニ番號ヲ分テ抽籤ヲ施行ス可シ
 第百十八條 一府縣ノ臨時徵兵事務全ク竣ルノ後府縣駐在官ハ人別表檢査表ヲ點檢シ兵種及ヒ部類ヲ分テ人別表ハ臨時徵員明細名簿トシ檢査表ハ臨時徵員檢査名簿トシ籤簿ト共ニ營所後備軍司令官ニ差出シ該官ハ之ヲ一師管ニ取纏メ兵種ヲ分テ人員表ヲ製シ名簿ト共ニ鎮臺後備軍司令官ヲ經テ鎮臺司令官ニ差出シ鎮臺司令官ハ其軍管人員表ヲ製シ之ヲ陸軍省ニ開申ス可シ
 第百十九條 臨時徵兵事務ニ本章ニ掲クル諸條ヲ除ク外定期徵兵事務ニ準シ便宜處分ス可シ
 第百二十條 國民兵ヲ徵集スルノ方法ハ別ニ之ヲ定ムル可シ
 第十七章 雜則

第百二十一條 徵兵令第十條ニ據リ現役志願ノ者ハ其願書第十四條ニ據リ戶長郡區長及奧書證印ヲ受ケ徵兵檢査所ニ出願ス可シ但檢査所ニ往復ノ旅費ハ合格者ニ限リ官給ス
 第百二十二條 徵兵令第十七條第十八條第一項乃至第三項及ヒ第十九條ニ當ル者年齡滿三十七歲以下ニシテ現役ヲ志願スルトキハ前條ノ手續ヲ以テ徵兵檢査所ニ出願ス可シ但旅費ハ前條ニ同シ
 第百二十三條 徵兵令第十一條及ヒ第十八條第二項ノ卒業證書ハ學期二箇年以上ノ學校ニ於テ二箇年以上ノ課程ヲ卒リタル證書ニ限ル
 第百二十四條 徵兵令第十七條ニ當ル者ハ徵集スルトキハ其項目ノ順序ニ從テ可シ
 第百二十五條 徵兵令第十七條第一項及ヒ第二項ノ兄弟ハ同戶籍中ノ實兄弟ニ限ル
 第百二十六條 徵兵令第十七條第一項ノ兄弟同時徵集ニ當リ檢査ノ上共ニ合格スルトキハ情願ニ據リ一人ヲ猶豫ス可シ
 前項ノ者他府縣ニ寄留シ該地ニ於テ檢査ヲ受ケント欲スルトキハ各自届出ヲ爲ス年ノ八月十五日迄ニ其旨ヲ寄留地戶長ニ願出本籍戶長ニ届出可シ
 第百二十七條 武官並ニ陸海軍生徒ノ兄弟ハ徵兵令第十七條第一項第二項ニ據リ限ラレ在テハ徵兵令第十七條第一項第二項ニ據リ徵備兵後備兵召集中死没又ハ公務ノ爲メ負傷シ

若シハ疾病ニ罹リ免役シタル者ノ兄弟徵集ニ當ルトキハ徵兵令第十七條第二項ニ據リ徵集猶豫ニ屬ス可シ

第百二十九條 徵兵令第十七條第一項ノ現役兵ノ兄或ハ弟一人ハ徵集ヲ猶豫スルモ現役中ノ者其年四月現役滿期或ハ脱走中又ハ歸營償勤中ナルトキハ徵集ニ應ズ可シ

第百三十條 徵兵令第十七條第十八條第十九條及ヒ第二十一條ニ當リタル者七個年間に其資格ヲ失ヒタルトキハ徵集スト雖モ更ニ徵兵令第十七條及ヒ第十八條第七項ニ當ル者並ニ陸海軍生徒トナル者ハ徵集猶豫ニ屬ス可シ

第百三十一條 各自届出後即チ九月十六日以後ニ於テ徵兵令第十八條第一項第二項第三項第四項陸海軍生徒第十九條及ヒ第二十一條ニ當ルモ徵集猶豫ノ限ニ在ラスト雖モ翌年四月十一日以後九月十五日迄ニ該條項ノ名稱ヲ得タル者ハ徵集猶豫ニ屬ス可シ

第百三十二條 徵兵令第十八條第三項ノ生徒ニシテ二個年以上ノ課程ヲ卒リタル者ハ同令第三十一條ニ據リ第一豫備徵員ニ編入ス可キヲ以テ徵兵検査時限ニ至レハ郡區長ヨリ其學校ニ通牒シ最寄ノ徵兵検査所ニ出頭セシメ身體ノ検査ヲ受ケシム可シ

第百三十三條 徵兵令第十八條第三項ニ掲ケタル官立大學校ニ準テ官立學校ノ左ノ如シ

一 工部大學校

十七年十二月文部省第四
號ヲ以テ文部省所轄ニ屬シ
東京法學部省所轄ニ屬シ
皆加ス

二 農商務省駒場札幌農學校

三 司法省法學學校

第百三十四條 徵兵令第十八條第二項第三項第四項第九條第二十條第五項及ヒ第二十一條ニ當ル者其事故止ミタルハ學校長若シハ所屬長ヨリ本人所管ノ府縣廳ニ通牒ス可シ

第百三十五條 徵兵令第十九條ニ掲ケル修業一個年以上ノ課程ヲ卒リタル生徒トハ該校ニ於テ其課程ヲ卒リタル者ノ限ラズ他ノ學校ヨリ入學シ一個年以上ノ課程ヲ卒リタル生徒ニ編入セラレタル者亦該條ニ據リ徵集猶豫ニ屬ス可シ

第百三十六條 官吏判任及ヒ戶長ハ徵兵令第二十條第一項ニ據リ召集ヲ猶豫スト雖モ準官吏ハ該條項ニ據リ召集ヲ猶豫スルノ限ニ在ラス

第百三十七條 附籍戶主及ヒ其嗣子或ハ承祖ノ孫ハ徵兵令第十二條第一項ニ據リ徵集スト雖モ其戶主徵兵各自届出期限即チ九月十五日以前ニ一戶ヲ設立スルトキハ徵兵令第十七條第三項及ヒ第五項ニ據リ徵集猶豫ニ屬ス可シ但シ分家シ又ハ絶家若シハ廢家ヲ再興シタル戶主ニシテ更ニ附籍シタル後別ニ一戶ヲ設立スルモ本條ノ限ニ在ラス

第百三十八條 徵兵令第二十三條第四項ノ嗣子或ハ承祖ノ孫ハ徵集スト雖モ其戶主分家又ハ絶家廢家再興後廢疾不具等トナリ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルトキ又ハ重罪ノ刑ニ處セラ

レナルトキハ徵集猶豫ニ屬ス可シ
 第三百二十九條 徵兵令第三十二條第二項ノ嗣子或ハ承祖ノ孫ハ
 徵集スト雖モ各自届出ヲ爲ス年ノ九月十五日迄ニ前嗣子承祖
 ノ孫若クハ相續人同ノ戸籍廢疾又ハ不具等トナリ一家ノ生計ヲ
 營ムコト能ハサル者ニ齊シキトキ又ハ重罪ノ刑ニ處セラレタ
 ルトキハ徵集猶豫ニ屬ス可シ
 第四百十條 徵兵令第二十二條第二項ニ當ル嗣子或ハ承祖ノ孫
 ニシテ其第六項ニ據リ戸主トナリタル者及ヒ其第七項ノ戸主
 ハ徵集スト雖モ其徵集ニ應ス可キ年ノ一月迄ニ前戸主同ノ戸籍
 已ニ六十歳ニ至ルカ又各自届出ヲ爲ス年ノ九月十五日迄ニ廢
 疾又ハ不具等トナリ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサル者ニ齊シ
 キトキ又ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ徵集猶豫ニ屬ス可
 シ
 第四百十二條 徵兵令第十七條第三項第三十二條第三項及ヒ第
 七項ニ掲ケル六十歳又同令第二十二條第五項及ヒ第九項ニ掲
 ケル五個年ハ徵集ニ應ス可キ年ノ一月ヲ以テ分界ト爲ス可シ
 第四百十二條 徵兵令第十八條第五項第六項ニ當ル者ハ事故ノ
 存スル間徵集猶豫ニ屬スト雖モ毎年檢査所ニ出頭シ身體ノ檢
 査ヲ受ク可シ
 第四百十三條 徵兵檢査呼出又ハ入營ニ際スルトキハ民事訴訟
 爲メ裁判所ニ召喚アリト雖モ檢査又ハ入營日時ヲ延期セス
 第四百十四條 戰時若クハ事變ニ際シテハ第八十條第八十五條

但書及ヒ第八十九條ニ當ル事故生スト雖モ詮議ニ及ハズ
 第四百十五條 徵兵令第十七條第四項及ヒ同令第三十二條ノ諸
 項ニ當ル廢疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサ
 ル者ハ徵兵檢査所ニ呼出シ檢査ス可シ但起居自在ナラサル疾
 患ニシテ車駕等ヲ用フルモ出頭スル能ハサル者ハ府縣駐在官
 醫官及ヒ府縣兵事課長其家ニ就キ檢査スルコトアル可シ
 第四百十六條 前條ノ者他府縣ニ寄留シ該地ニ於テ檢査ヲ受ケ
 ント欲スルトキハ適齡者ノ各自届出ヲ爲ス年ノ八月十五日迄
 ニ其旨ヲ寄留地戸長ニ願出本籍戸長ニ届出可シ
 第四百十七條 徵兵署閉鎖後徵兵令第三十六條ニ當ル者ハ翌年
 之ヲ徵集ス可シ
 第四百十八條 徵兵令第四十一條ニ當ル者其年疾病或ハ犯罪等
 ニテ期限ニ際シ入營スルコト能ハスシテ九月一日ニ至ルモ事
 故尙止マサルトキハ翌年更ニ檢査ヲ遂ケ仍ホ先入兵トシテ徵
 集ス可シ
 第四百十九條 徵兵令第四十一條ニ當ル者ニシテ爾後同令第十
 七條第十八條第四項第五項第六項及ヒ第十九條ニ該當スト雖
 モ徵集猶豫ノ限ニ在ラス
 第四百五十條 徵兵既行ノ地在籍ノ者ニシテ沖繩縣及ヒ北海道ノ
 内徵兵未行ノ地ニ轉籍シ更ニ他ノ府縣ニ寄留スル者ハ寄留地
 ニ於テ各自届出ヲ爲シ其本籍ノ者ト同シク徵集ニ應ス可シ
 徵兵未行ノ地ニ單身寄留ノ者ハ本籍地ニ歸リ徵集ニ應ス可シ

ト雖モ全戸寄留ノ者ハ徵集猶豫ニ屬ス可シ
 第五百一十一條 徵兵令第三十四條第三十五條第三十六條第三十
 九條ノ届出ヲ怠リ又ハ兵役ヲ免レンカ爲メ身體ヲ毀傷シ疾病
 ナ作爲シ其他詐偽ノ所爲ヲ用ヒ又ハ逃亡潜匿シタル者又ハ正
 當ノ故ナク検査所ニ參會セサル者アルトキハ普通治罪法ノ手
 續ニ據リ之ヲ告發ス可シ
 第五百一十二條 徵兵署又ハ徵兵検査所ニ差出ス可キ願書ハ三通
 届書ハ二通徵兵署宛ニテ差出ス可シ

第十八章 附則

第五百一十三條 明治十四年一月ヨリ明治十六年十二月迄ニ滿三
 十歳トナリタル者コシテ舊徵兵令第二十八條ニ當リ國民軍ノ
 外免役ニ屬スル者新徵兵令ニ照シ常備年期ノ第七年検査時限
 内ニ在テ名稱ヲ罷メタルトキハ更ニ徵集ニ應ヒシメ其第七年
 検査時限ヲ經過スル者ハ舊徵兵令ニテ處分セシ儘之ヲ名簿ニ
 据ヘ置ク可シ
 第五百一十四條 明治十四年一月ヨリ明治十六年十二月迄ニ滿二
 十歳トナリタル者ニシテ舊徵兵令第二十九條第三十條第三十
 二條及ヒ第三十四條ニ當リ平時免役又ハ徵集猶豫ニ屬スル者
 新徵兵令ニ照シ常備年期ノ第七年検査時限内ニ在テ名稱ヲ罷
 メタルトキハ更ニ徵集ニ應ヒシメ其第七年検査時限ヲ經過ス
 ル者ハ新徵兵令第三十二條ニ據リ第二豫備徵員ト爲ス可シ
 第五百一十五條 現今豫備兵服役中ノ者ハ最初豫備軍ニ編入セシ

年ノ四月二十日ヨリ起算シ四個年ノ役ニ服セシメ滿期ノ後後
 備兵役ニ服セシム但定期ニ在ラズシテ臨時豫備軍ニ編入セシ
 者ハ其編入セシ日ヨリ起算シ四個年ノ役ニ服セシメ滿期ノ後
 後備兵役ニ服セシム
 第五百一十六條 現今後備兵服役中ノ者ハ最初後備軍ニ編入セシ
 年ノ四月二十日ヨリ起算シ五個年ノ役ニ服セシメ滿期ノ後國
 民兵役ニ服セシム但定期ニ在ラズシテ臨時後備軍ニ編入セシ
 者ハ其編入セシ日ヨリ起算シ五個年ノ役ニ服セシメ滿期ノ後
 國民兵役ニ服セシム
 第五百一十七條 舊徵兵令第三十六條ニ據リ第一豫備徵兵服役中
 ニシテ年齡二十七歳ヲ經過セシ者及ヒ現ニ第二豫備徵兵服役
 中ノ者ハ新徵兵令第三十二條ニ據リ第二豫備徵員ト爲ス可シ
 第五百一十八條 新徵兵令第二十二條ノ諸項ニ當ル者ト雖モ其事
 柄ノ明治六年一月十日即チ徵兵令創定以前ニ係ル者ハ該條項
 ナリテ處分スルノ限ニ在ラス
 第五百一十九條 明治十六年十二月迄ニ年齡滿二十歳トナリタル
 者ニシテ舊徵兵令第六十條第六十一條及ヒ舊徵兵事務條例第
 百八十條ノ届出ヲ怠タル者明治十七年九月十五日迄ニ届出サ
 ルトキハ新徵兵令第四十三條ニ據リ處分ス可シ
 (書式略之)

○海軍志願兵徵募規則 明治十六年十二月三十八號布達

沿革略記

明治五年九月海軍省乙第百二十七號達ヲ以テ海軍兵員徵募規則ヲ定ム○十六年十二月第三十八號布達ヲ以テ海軍志願兵徵募規則ヲ定ム是レ現行法ナリ

海軍志願兵徵募規則別冊ノ通之ヲ定ム

(別冊)

海軍志願兵徵募規則

第一條 海軍兵員タラシトシテ志願スル者ハ本則ニ照シテ之ヲ徵募ス但軍樂隊ハ別ニ規則ヲ設ク

第二條 志願兵ノ服役ヲ別ナテ現役及ヒ豫備役トス

現役年期卒ニ在テハ長期ヲ十個年短期ヲ七個年トシ准卒ニ在テハ總テ三個年トス

豫備役ハ現役長期ヲ終リシ者ヲシテ二個年間短期ヲ終リシ者ヲシ

テ五個年間之ニ服セシム

准卒ニ在テハ豫備役ナシ

第三條 卒ニ徵募スル者ハ年齢十七歳ヨリ二十五歳迄ノ者ニシテ其職名ノ大別ハ左ノ如シ

水兵、火夫、職工、看病夫

第四條 准卒ニ徵募スル者ハ年齢十五歳ヨリ四十歳迄ノ者ニシテ其職名ハ左ノ如シ

裁縫夫、造靴夫、守燈夫、剃夫

厨宰介及ヒ諸厨宰

割烹手介、割烹夫及ヒ諸割烹手

諸從僕及ヒ諸仕丁

第五條 卒ノ年齢ハ第二條ニ掲クル如シト雖モ左ニ掲クル者ハ出願スルコトヲ得

一 十五歳以上ニシテ體格強壯ナル者但十七歳ニ滿タサレハ服役

年數ニ算入セス

- 一 三十五歳未満ニシテ西洋形船舶或ハ造船所等ニ從事シ其技藝ニ熟達スル者
- 二 三十五歳未満ニシテ府縣立商船學校ノ卒業證書ヲ所持スル者
- 三 前二項ノ者ハ直ニ下士ニ任スルコトアリ
- 四 前二項ノ者ハ直ニ下士ニ任スルコトアリ
- 第六條 水兵火夫ニ徵募スル者ノ身幹ハ五尺以上トス但十七歳未満ノ者ハ四尺九寸以上トス
- 第七條 豫備役ニ入ル者ニハ其證書ヲ附與シ常ニ家居シテ産業ヲ營マシメ戰時或ハ事變ニ際シ之ヲ召集ス
- 第八條 卒ニシテ現役ヲ終リ尙一個年以上ノ再役ヲ出願スル者ハ之ヲ許可ス但現役十二年ニ滿ル者ハ豫備役ニ服セシメス
- 第九條 准卒ニシテ兵役ヲ終ル者ハ尙一個年以上ノ再役ヲ出願スルコトヲ得
- 第十條 現役中技藝ニ熟達シ行狀方正且才氣アル者ハ之ヲ拔擢シテ

下士ニ任ズル者

- 第十一條 現役中ハ食料被服ヲ官給シ且相當ノ日給ヲ與フ
- 第十二條 現役中ハ卒ノ家族アル者ニ限り其扶助金トシテ一個年金拾圓宛ヲ給ス而シテ其半額宛ヲ每六個月ニ海軍省ヨリ各地方廳ヲ經テ其家族ニ下付スルモノトス(十七年第九拾壹號)
(布達ヲ以テ改正)
- 第十三條 服役年期中ハ現役豫備役ヲ論セス何等ノ事故アルモ免役出願ヲ許サス
- 第十四條 現役年期已ニ滿ル者ト雖モ戰時若クハ事變ノ際或ハ航海中ハ其期ヲ延スユトアル可シ此場合ニ於テハ其延期日數ヲ豫備役年期ヨリ除算ス
- 第十五條 徵募シ地方及ヒ其人員等ハ徵募ヲ要スルトキ豫メ海軍卿ヨリ其地方廳ニ達ス可シ但准卒ハ臨時鎮守府或ハ艦船營ヨリ徵募スルモノトス
- 第十六條 地方廳ハ其達書ニ記載スル日限迄ニ本籍寄留ノ別ナク志

願人ヲ調査シ其人員ヲ鎮守府ニ通牒ス可シ

第十七條 志願人ハ父兄其他親族或ハ後見人ヲ以テ身元引受人ト爲ス可シ然レトモ居住ノ地ニ親族或ハ後見人ナキトキハ其地ニ本籍アリ身元正確ナル者ヲ以テ之ニ充ルコトヲ得

第十八條 身元引受人ハ第一號書式ノ願書ニ志願人ノ履歷書ヲ添ヘ管轄地方廳ニ差出シ該廳ハ其願書正副共ニ巡回募兵使ニ出ス可シ但准卒ハ身元引受人ヨリ直ニ鎮守府或ハ艦船營ニ出ス可シ

第十九條 左ニ掲クル者ハ兵役ヲ出願スルコトヲ許サス

刑事被告人トナリ裁判未決ノ者

公權停止中ノ者

重罪ノ刑ニ處セラレタル者

第二十條 募兵官員及ヒ其職務ハ左ノ如シ

募兵使

海軍佐官或ハ大尉ヲ以テ之ニ充ツ府縣ニ派出シテ兵員徵募ノ事

募兵副使

海軍尉官ヲ以テ之ニ充ツ募兵使ヲ補助スル事ヲ掌ル但時宜ニ因

リ之ヲ欠クコトアリ

募兵醫官

海軍軍醫ヲ以テ之ニ充ツ募兵使ニ從ヒ志願人ノ身幹體格ヲ検査

スル事ヲ掌ル

募兵書記

海軍下士或ハ十等以下ノ軍屬ヲ以テ之ニ充ツ募兵使ニ從ヒ諸記

録ノ事ヲ掌ル

第二十一條 地方長官ハ屬官ヲシテ管内兵員徵募ノ事務ヲ補助セシ

ム可シ

第二十二條 郡區長及ヒ戸長ハ其郡區町村内兵員徵募ニ關スル事ヲ

掌ル可シ

第二十三條 募兵使ハ府縣屬官及ヒ郡區長ト商議シ豫メ検査ノ場所及ヒ日割人員等ヲ定メ戸長ヲ經テ志願人ニ出頭ヲ命ス可シ

第二十四條 志願人ノ検査ハ府縣屬官或ハ郡區長ノ立會ヲ要ス但郡區長事故アルトキハ其書記ヲシテ代理セシムルコトヲ得

第二十五條 検査合格ノ者ニハ募兵使ヨリ立會ノ府縣屬官或ハ郡區長ヲシテ第二號書式ノ採用證書ヲ附與セシム

第二十六條 検査合格ノ者ニ採用證書ヲ附與シタルトキハ戸長ヨリ第三號書式ノ本人戸籍明細書ヲ出サシム其用紙ハ募兵使ヨリ下附ス

第二十七條 寄留地ニ於テ採用スル者ハ募兵使ヨリ其旨本籍ノ地方廳ニ通知シ該廳ハ本人所管ノ戸長ヲシテ第二十六條ニ掲クル戸籍明細書ヲ出サシム募兵使或ハ鎮守府ニ送附ス可シ

第二十八條 採用ノ兵員ハ募兵使携帶ノ誓約簿ニ各自記名捺印ス可シ

第二十九條 合格ノ者所要ノ人員ニ超過スルトキハ抽籤法ヲ以テ當籤者ヲ採用ス

第三十條 抽籤ハ各自ニ之ヲ行ハシムルモノトス但便宜ニ因リ一名乃至三名ヲ抽籤總代ト爲スコトヲ得

第三十一條 検査呼出ニ際シ病氣或ハ父母ノ重病等ノ爲メ一時出頭シ難キ者或ハ之カ爲メ願書却下ヲ請フ者ハ其事實ヲ詳記シ戸長ノ證印ヲ受ケ郡區長ヲ經テ募兵使ニ申出其處分ヲ受ク可シ

第三十二條 徵募ノ兵員各地發程ノ期限ハ募兵使ヨリ達ス可シ府縣屬官或ハ郡區長ハ府縣或ハ郡區毎ニ其兵員ヲ便宜ノ場所ニ集合セシム其内一名若クハ二名ヲ取締ト爲シ同時ニ發程セシム可シ

第三十三條 疾病其他已ムヲ得サル事故ニテ發程シ難キ者ハ其事實ヲ詳記シ 疾病者ハ醫師ノ診斷書ヲ添フ 戸長ノ證印ヲ受ケ郡區長ヲ經テ募兵使或ハ鎮守府ニ届出可シ

第三十四條 徵募ノ兵員各自居住ノ地ヨリ入營迄ノ旅費ハ官給トス

検査ノ場所へ往復並ニ滞在等ノ費用ハ總テ自辨タル可シ
第三十五條 現役中公務ニ因リ傷痍疾病ヲ受ケ兵役ニ堪ヘ難キ者ハ
海軍恩給令ニ照準シテ相當ノ恩給ヲ與フ

第三十六條 現役中傷痍疾病ニ罹ル者ハ海軍病院ニ入レ治療セシム
若シ兵役ニ堪ヘ難キ者ハ免役ノ上旅費ヲ給シ歸郷セシム但服役實
期十一年以上ノ者ハ第三十五條ニ同シ

第三十七條 現役中父母ノ重病或ハ一家ノ安危ニ係ル等非常ノ事故
アリ一時已ムヲ得スシテ父母又ハ親族等ヨリ其事實ヲ詳記シ疾病
ハ醫
師ノ診斷
書ヲ添フ郡區長ノ奥書證印ヲ受ケ本人ノ所轄廳ニ願出ルトキハ詮
議ノ上往復ヲ除キ二週日以内ノ歸省ヲ許ス其旅費ハ自辨タル可シ
但二等若水兵若火夫ハ本文ノ限ニ在ラス

第三十八條 (十七年第二十一號布
達ヲ以テ本條刪除)
(書式略之)

○戒嚴令 明治十五年八月
第三十六號布告

戒嚴令別冊ノ通制定ス
(別冊)

戒嚴令

第一條 戒嚴令ハ戰時若クハ事變ニ際シ兵備ヲ以テ全國若クハ一地
方ヲ警戒スルノ法トス

第二條 戒嚴ハ臨戰地境ト合圍地境トノ二種ニ分ツ

第一 臨戰地境ハ戰時若クハ事變ニ際シ警戒ス可キ地方ヲ區畫シ
テ臨戰ノ區域ト爲ス者ナリ

第二 合圍地境ハ敵ノ合圍若クハ攻撃其他ノ事變ニ際シ警戒ス可
キ地方ヲ區畫シテ合圍ノ區域ト爲ス者ナリ

第三條 戒嚴ハ時機ニ應シ其要ス可キ地境ヲ區畫シテ之ヲ布告ス

第四條 戰時ニ際シ鎮臺營所要塞海軍港鎮守府海軍造船所等遠カニ合圍若クハ攻撃ヲ受クル時ハ其地ノ司令官臨時戒嚴ヲ宣告スルヲ得又戰略上臨機ノ處分ヲ要スル時ハ出征ノ司令官之ヲ宣告スルヲ得

第五條 平時土寇ヲ鎮定スル爲メ臨時戒嚴ヲ要スル場合ニ於テハ其地ノ司令官速カニ上奏シテ命ヲ請フ可シ若シ時機切迫シテ通信斷絶シ命ヲ請フノ道ナキ時ハ直ニ戒嚴ヲ宣告スルヲ得

第六條 軍團長師團長旅團長鎮臺營所要塞司令官或ハ艦隊司令長官艦隊司令官鎮守府長官若クハ特命司令官ハ戒嚴ヲ宣告シ得ルノ權アル司令官トス

第七條 戒嚴ノ宣告ヲ爲シタル時ハ直チニ其狀勢及ヒ事由ヲ具シテ之ヲ太政官ニ上申ス可シ

但其隸屬スル所ノ長官ニハ別ニ之ヲ具申ス可シ

第八條 戒嚴ノ宣告ハ曩ニ布告シタル所ノ臨戰若クハ合圍地境ノ區

畫ヲ改定スルヲ得

第九條 臨戰地境內ニ於テハ地方行政事務及ヒ司法事務ノ軍事ニ關係アル事件ヲ限リ其地ノ司令官ニ管掌ノ權ヲ委スル者トス故ニ地方官地方裁判官及ヒ檢察官ハ其戒嚴ノ布告若クハ宣告アル時ハ速カニ該司令官ニ就テ其指揮ヲ請フ可シ

第十條 合圍地境內ニ於テハ地方行政事務及ヒ司法事務ハ其地ノ司令官ニ管掌ノ權ヲ委スル者トス故ニ地方官地方裁判官及ヒ檢察官ハ其戒嚴ノ布告若クハ宣告アル時ハ速カニ該司令官ニ就テ其指揮ヲ請フ可シ

第十一條 合圍地境內ニ於テハ軍事ニ係ル民事及ヒ左ニ開列スル犯罪ニ係ル者ハ總テ軍衙ニ於テ裁判ス

刑法

第二編

第一章 皇室ニ對スル罪

- 第二章 國事ニ關スル罪
- 第三章 靜謐ヲ害スル罪
- 第四章 信用ヲ害スル罪
- 第九章 官吏瀆職ノ罪
- 第三編
- 第一章
- 第一節 謀殺故殺ノ罪
- 第二節 毆打創傷ノ罪
- 第六節 擅ニ人ヲ逮捕監禁スル罪
- 第七節 脅迫ノ罪
- 第二章
- 第二節 強盜ノ罪
- 第七節 放火失火ノ罪
- 第八節 決水ノ罪

- 第九節 船舶ヲ覆没スル罪
- 第十節 家屋物品ヲ毀壞シ及ヒ動植物ヲ害スル罪
- 第十二條 合圍地境內ニ裁判所ナク又其管轄裁判所ト通路斷絶セシ時ハ民事刑事ノ別ナク總テ軍衙ノ裁判ニ屬ス
- 第十三條 合圍地境內ニ於ケル軍衙ノ裁判ニ對シテハ控訴上告ヲ爲スヲ得ス
- 第十四條 戒嚴地境內ニ於テハ司令官左ニ記列ノ諸件ヲ執行スルノ權ヲ有ス但其執行ヨリ生スル損害ハ要償スルヲ得ス
- 第一 集會若クハ新聞雜誌廣告等ノ時勢ニ妨害アリト認ムル者ヲ停止スルヲ
- 第二 軍需ニ供ス可キ民有ノ諸物品ヲ調査シ又ハ時機ニ依リ其輸出ヲ禁止スルヲ
- 第三 銃砲彈藥兵器火具其他危險ニ涉ル諸物品ヲ所有スル者アル時ハ之ヲ檢査シ時機ニ依リ押收スルヲ

第四 郵便電報ヲ開緘シ出入ノ船舶及ヒ諸物品ヲ検査シ並ニ陸海
通路ヲ停止スルヲ

第五 戰狀ニ依リ止ムヲ得サル場合ニ於テハ人民ノ動産不動産ヲ
破壊燬燒スルヲ

第六 合圍地境内ニ於テハ晝夜ノ別ナク人民ノ家屋建造物船舶中
ニ立入り檢察スルヲ

第七 合圍地境内ニ寄宿スル者アル時ハ時機ニ依リ其地ヲ退去セ
シムルヲ

第十五條 戒嚴ハ平定ノ後ト雖モ解止ノ布告若クハ宣告ヲ受クルノ
日迄ハ其効力ヲ有スル者トス

第十六條 戒嚴解止ノ日ヨリ地方行政事務司法事務及ヒ裁判權ハ總
テ其常例ニ復ス

○法律規則中戰時ト稱スル場合 明治十五年八月
第三十七號布告

凡ソ法律規則中戰時ト稱スルハ外患又ハ内亂アルニ際シ布告ヲ
以テ定ムル者ナス

○徵發令 明治十五年八月
第四十三號布告

徵發令別冊ノ通制定ス

(別冊)

徵發令

第一條 徵發令ハ戰時若クハ事變ニ際シ陸軍或ハ海軍ノ全部又ハ一
部ヲ動カスニ方リ其所要ノ軍需ヲ地方ノ人民ニ賦課シテ徵發スル
ノ法トス

但平時ト雖モ演習及ヒ行軍ノ際ハ本條ニ准ス

第二條 徵發ハ陸軍若クハ海軍官憲ノ徵發書ヲ以テ之ヲ行フ

第三條 左ニ記列スル官憲ハ徵發書ヲ出スノ權ヲ有ス

一 陸軍卿海軍卿鎮臺司令官及ヒ鎮守府長官

二 陸軍ニ於テハ特命司令官軍團長師團長旅團長分遣隊長若クハ演習及ヒ行軍ノ軍隊長

三 海軍ニ於テハ特命司令官艦隊司令長官艦隊司令官分遣艦長若クハ操練及ヒ航海ノ艦隊司令官又ハ艦長

第四條 徵發ス可キモノ、種類ニ依リ徵發區會社モ之ヲ定ムルコト准スニ左ノ如シ

一 第十二條第一項ハ

府縣

二 第十二條第二項及ヒ第三項ハ

郡區

三 第十二條第四項以下各項及ヒ第十三條各項ハ

町村

四 船舶會社所有ノ船舶及ヒ鐵道會社所有ノ瀛車ハ

會社

第五條 徵發ス可キモノハ徵發區内ニ現在スルモノニ限ル

第六條 徵發書ハ徵發區ニ從ヒ府知事縣令郡區長戸長若クハ停車場

長船舶會社ノ店長ニ付ス可シ

第七條 徵發書ヲ受ケタル府知事縣令郡區長戸長若クハ停車場長船舶會社ノ店長ハ時期ヲ誤ルコトナク其供給ヲ完全セシムルノ責アルモノトス

第八條 各徵發區ニ於テハ臨時徵發ニ應ス可キ便宜ノ方法ヲ豫定ス可キモノトス

第九條 徵發ヲ課セラレタルモノハ時期ニ違フコトナク之ヲ供給スルノ義務アルモノトス若シ其時期ニ違フトキハ府知事縣令郡區長戸長他ノ方法ヲ以テ調達シ爲メニ生シタル費用ハ本人ヲシテ之ヲ辨償セシム但會社ニ係ルモノハ陸海軍官憲直ニ其處分ヲ爲ス可シ
第十條 徵發ヲ課セラレタルモノノ商用其他ノ事故ヲ以テ供給ヲ拒ミ又ハ供給ス可キモノヲ藏匿シタルトキハ直ニ之ヲ使用スルコトヲ得

第十一條 供給ヲ受ケタル陸海軍官憲ハ其受領證票ヲ府知事縣令郡

區長戸長若クハ停車場長船舶會社ノ店長ニ交付スヘシ

第十二條 徵發ス可キモノ左ノ如シ

- 一 米麥秣莠鹽味噌醬油漬物梅干及ヒ薪炭
- 二 乘馬馱馬駕馬車輛其他運搬ニ供スル獸類及ヒ器具
- 三 人夫
- 四 宿舍廐園及ヒ倉庫
- 五 飲水石炭
- 六 船舶
- 七 鑛道瀛車
- 八 演習ニ要スル地所
- 九 演習ニ要スル材料器具

第十三條 戰時若クハ事變ニ際シテハ第十二條ノ諸項ニ掲クルモノ、外徵發ス可キモノ左ノ如シ但平時ノ演習及ヒ行軍ニハ徵發スルコトヲ得ズ

一 造船所工作所及ヒ軍事ノ工作ニ要スル材料器具

二 職工礦夫洗濯人ノ類

三 被服裝具艸鞋兵器彈藥船具寢具藥劑治療器械及ヒ綳帶具

四 水車搗春ノ類

五 病院

第十四條 第十二條第二項中徵發ノ免除ヲ受ク可キモノ左ノ如シ

一 皇族所用ノ車馬

二 外國公使館并ニ領事館ニ屬スル車馬

三 乘馬本分タル職務ニ要スル馬匹

四 郵便用ノ車馬

五 公認セラレタル種牛種馬

第十五條 第十二條第四項中徵發ノ免除ヲ受ク可キモノ左ノ如シ

一 公務ニ屬スル廩署

二 皇族公邸宅

- 三 外國公使館領事館及ヒ其所屬館
- 四 鐵道電信郵便用ノ建造物
- 五 陸海軍將校并ニ同等官現住ノ家屋
- 六 博物館書籍館
- 七 病院盲啞院棄兒院
- 八 學校但臨戰合圍地境內ニ在リテハ此限ニ在ラス
- 九 製造場内機械室
- 第十六條 第十二條第二項ニ掲クルモノ、使用ハ其原用ヲ轉シテ他
用ニ供スルヲ許サス但戰時若クハ事變ニ際シテハ此限ニ在ラス
- 第十七條 第十二條第二項ニ掲クルモノハ其差出場所ヨリ六里未滿
ノ地ニ於テ使用スルヲ例トシ一日ノ使用ハ六里ニ越ユルコトヲ得
ス但戰時若クハ事變ニ際シテハ六里以外ノ地ニ使用スルコトヲ得
- 第十八條 第十二條第四項ニ掲クルモノハ合圍地境內ヲ除クノ外居
住者ノ起臥及ヒ營業ニ必要ナル場所ヲ徵用スルコトヲ得ス但營業

- ニ必要ナルモ旅店等ハ此限ニ在ラス
- 第十九條 宿舍ノ廣狹ハ其地家屋ノ數ト隊伍ノ編制トニ從ヒ一定シ
難シ故ニ臨時適宜ニ之ヲ定ム
- 第二十條 第十三條第四項ニ掲クルモノハ陸軍若クハ海軍ノ都合ニ
依リ特ニ其場所ヲ指定スルコトアルヘシ
- 第二十一條 宿舍ヲ定メタルノ後ハ區町村ノ便宜ヲ以テ他ニ轉移セ
シムルコトヲ許サス廐園倉庫亦同シ
- 第二十二條 宿舍廐園ノ徵發ヲ課セラレタルモノハ併セテ人馬ノ食
飼ヲ供給ス可シ但駐軍三日以上ニ至ルトキハ第四日ヨリ食飼ハ陸
軍若クハ海軍ノ自辨トス
- 第二十三條 第十二條第六項ノ徵發ニ係リ其乘載人馬ノ食飼ヲ要ス
ルモノハ併セテ供給セシム
- 第二十四條 第十二條第六項及ヒ第七項ニ掲クルモノハ戰時若クハ
事變ニ際シ借切トシテ之ヲ徵用スルコトアル可シ

第二十五條 第十二條第二項第六項及第七項ニ掲クルモノハ其操業者ヲ併セテ徵用スルヲ例トス但時宜ニ依リ各個ニ分別シテ徵用スルコトヲ得

第二十六條 第十二條第六項ニ掲グルモノヲ操業者ト各個ニ分別シテ徵用スルハ戰時若クハ事變ノ際ニ限ル但船橋及ヒ艇船ニ充ツルモノハ此限ニ在ラス

第二十七條 第十二條第七項ニ屬スル汽車其屬具鐵道建築所用ノ材料器具及ヒ操業者ヲ各個ニ分別シテ徵用スルハ戰時若クハ事變ノ際ニ限ル

第二十八條 第十三條第五項ニ掲クルモノハ陸海軍病院ノ補助トシテ徵用スルヲ例トス但合圍地境內ニ在リテハ全ク明渡サシムルコトヲ得

第二十九條 徵發ニ係ルモノハ第三十一條乃至第五十條ニ定ムル所ノ方法ニ從ヒ賠償スルハ出陣時ニ限リ

第三十條 徵發物件ヲ差出場所ニ輸送スルハ徵發區ノ義務トシ其輸送賃ヲ支辨セス

第三十一條 賠償ハ平時ト戰時トヲ論セス其時々之ヲ支辨スルモノトス但戰時若クハ時變ニ際シ紛擾ノ爲メ延滞シテ三ヶ月ヲ越ユルトキハ年六分ノ割ヲ以テ其利子ヲ付ス

第三十二條 賠償ハ徵發區毎ニ一括シテ府知事縣令郡區長戸長停車場長船舶會社ノ店長ヨリ之ヲ請求ス可シ

第三十三條 徵發物件ノ其使用ノ爲メニ毀損シタルモノハ賠償ス其金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定ニ任ス其毀損ハ持主若クハ操業者ヨリ速ニ其地ニ在ル陸海軍官憲若クハ戸長ニ届出可シ其届出ハ徵用済引渡ノ後左ノ期限ヲ越ユ可カラス若シ其期限ヲ越ヘ又ハ期限中持主若クハ操業者ニ於テ使用セシトキハ無効トス

一 西洋形船舶

七日間

- 二 地所 評價委員ノ告示スル時日間
- 三 其他ノ物件 一日間

第三十四條 第十二條第一項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ其地市場ノ前三ヶ年間ノ平均價ヲ取り之ヲ定ム其平均價ノ取り難キモノハ評價委員ノ評定ニ任ス

第三十五條 第十二條第二項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ其郡區平常ノ賃價トス但物件ト操業者トナ各個ニ分別シテ徵用シタルトキハ其郡區平常ノ雇賃及ヒ借賃ニ准シテ賠償ス

第三十六條 第十二條第二項ノ徵發ニ係ルモノヲ宿泊セシメ連日使用スルトキ及ヒ六里以外ノ地ニ於テ使用スルトキハ第三十二條ノ例ニ拘ハラス賃價ノ半額ヲ前給シ宿泊食飼ヲ官給ス但此場合ニ於テハ賃價ノ四分ノ一ヲ減ス

第三十七條 第十二條第二項及ヒ第六項ニ掲クルモノヲ買上クルトキハ勿論其他使用ノ都合ニ依リ價格ノ豫定ヲ要スルトキハ其金額

ヲ定置ク可シ其金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定ニ任ス

第三十八條 第十二條第三項ノ徵發ニ係ルモノハ第三十五條ニ准シテ賠償シ第三十六條ヲ適用ス

第三十九條 第十二條第四項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ陸海軍省ニ於テ之ヲ定ム

第四十條 第十二條第五項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ其地平常ノ代價トス

第四十一條 第十二條第六項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ別ニ命令書アルモノ、外左ノ區別ニ從フ

- 一 出船ノ定時アリテ定路ヲ航スルモノハ平常ノ定賃
- 二 定路ヲ航スルモ特ニ出船時日ヲ命シタルトキハ其乘載量五分ノ三ニ滿チタル以上ハ前項ノ例ニ准ス若シ之ニ滿タサルモ五分ノ三ニ値ル平常ノ定賃

三 出船及ヒ航路ノ定メナクシテ定賃ナキモノ又ハ運送ヲ以テ營業トセサルモノ等其賠償金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定額

第四十二條 第二十四條ノ場合ニ於ケル賠償金額ハ操業者平常ノ給料航泊實費及ヒ船舶ノ損料トス其損料ハ一ヶ月ニ各船舶買入代價六十四分ノ一トス

第四十三條 第二十六條ノ場合ニ於ケル賠償金額ハ操業者ニハ平常ノ給料船舶ニハ第四十二條ノ損料トス但船橋及ヒ舢舨ニ充テタルモノ、賠償金額ハ第四十一條第三項ニ准ス

第四十四條 第十二條第七項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ別ニ命令書アルモノ、外平常ノ定賃トス

第四十五條 第二十七條ノ場合ニ於ケル賠償金額ハ操業者ニハ平常ノ給料物件ニハ其地平常ノ代價若クハ損料トス其金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定ニ任ス

第四十六條 第十二條第八項ノ徵發ニ係ルモノハ其植物ニ損害ヲ加ヘ又ハ地形ヲ變更シタルトキニ限り賠償ス其金額ハ評價委員ノ評定ニ任ス

第四十七條 第十二條第九項ノ徵發ニ係ルモノハ其地平常ノ代價若クハ相當ノ損料ヲ賠償ス

第四十八條 第十三條第一項第三項及ヒ第四項ノ徵發ニ係ルモノハ其地平常ノ代價若クハ損料ヲ賠償ス其金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定ニ任ス

第四十九條 第十三條第二項ノ徵發ニ係ルモノハ第二十五條ニ准シテ賠償シ第三十六條ヲ適用ス

第五十條 第十三條第五項ノ徵發ニ係ルモノハ通常患者ノ例ニ從フテ賠償ス全ク明渡サシムルトキハ第三十九條ノ例ニ准ス

第五十一條 徵發ヲ拒ミ或ハ規避シ或ハ漫リニ使役ヲ離レタルモノ及ヒ之ヲ教唆誘導シタルモノハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ

三圓以上三拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第五十二條 徵發ノ命令ヲ受ケタル府知事縣令郡區長戸長停車場長船舶會社ノ店長其處置ヲ爲サ、ルモノハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ貳拾圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス其懈怠ニ出ルモノハ貳拾圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十三條 徵發書ヲ出スノ權ヲ有スル官憲妄ニ徵發書ヲ出シ又ハ其權ヲ有セサル官憲徵發書ヲ出シタルトキハ一年以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

○徵發費用怠納者處分並其費用ニ關シ出訴方明治十六年八月第三十一號布告
徵發令ニ依リ負擔ス可キ費用ノ怠納者ハ明治十年十一月第七拾九號布告ニ依リ處分ス可シ但財産公賣ノ際買受望人ナキトキハ徵發區ニ没入シ不足金アルトキハ其區ノ損失ニ歸ス
右費用ニ關スル處分ニ就キ不服アル者ハ明治十五年五月第貳拾貳

號布告ニ依ル可シ

○徵發事務條例十五年十二月六號布告
徵發事務條例別冊ノ通之ヲ定ム
(別冊)

徵發事務條例

- 第一條 徵發事務條例ハ徵發令ニ基キ實際取扱ノ規準ヲ定ムルモノトス
- 第二條 陸軍若クハ海軍官憲ハ徵發區ノ大小遠近及ヒ供給力ヲ酌量シ供給ヲ受ク可キ日時ヲ豫定シテ徵發書ヲ出ス可シ
- 第三條 徵發書ノ書式ハ附錄第一號ノ例ニ準ス但戰時若クハ事變ニ際シテハ電信ヲ以テ徵發スルコトヲ得
- 第四條 徵發令第三條第二項及ヒ第三項中ニ掲クル特命司令官軍團長師團長司令官ハ時機ニ依リ其部下ノ各團長若クハ各艦隊司令官ニ徵發書ヲ出スノ權ヲ分任スルコトヲ得
- 第五條 徵發令第三條第二項中ニ掲クル特命司令官軍團長師團長旅團長分遣隊長第三項中ニ掲クル特命司令官艦隊司令官艦隊司令官分遣艦長ハ其獨立中ニ限リ徵發書ヲ出スノ權ヲ有ス故ニ師團長艦隊司令官ト雖モ軍團若クハ二艦隊以上ニ編制セラレタルトキハ徵發書ヲ出スノ權ナシ其軍團長若クハ艦隊

司令長官ノミ之ヲ有ス
 第六條 徵發令第三條第二項中ニ掲クル演習及ヒ行軍ノ軍隊長トハ諸國隊ヲ統フル長トシ官ヲ言ヒ第三項中ニ掲クル操練及ヒ航海ノ艦隊司令官トハ諸艦ヲ統フル長ヲ言ヒ艦長トハ先任艦長又ハ獨立艦長ヲ言フモノニシテ其長ノミ徵發書ヲ出スノ權ヲ有ス但陸軍演習若クハ海軍操練ノ時一ノ總指揮官ヲ置クト雖其部下ノ國隊若クハ各艦往返發着ノ地ヲ異ニスルトキハ往返中ニ限リ其國隊長若クハ艦長各自ニ徵發書ヲ出スノ權ヲ有ス
 第七條 徵發ニ應シタル人員ハ勉メテ彈丸ノ達セサル場所ニ於テ之ヲ使用ス可シ
 第八條 徵發物件其徵發ヲ課セラレタル地ニ現在スルモ其所有者又ハ其支配人不在ナルトキハ戶長及ヒ證人二人住其町内ニ又ハ預リ主又ハ同物品營業者立會ノ上其物件ヲ調査シ供給セシムヘシ
 第九條 徵發ヲ課セラレタルモノハ徵發令第十二條第六項第七項第八項第十三條第一項中造船所工作所第四項第五項ノ物件及ヒ第二十條ノ場合ヲ除クノ外其現在ノ所有品ヲ供給セサルモ便宜ニ從ヒ他ノ同品種ノモノヲ以テ換給スルコトヲ得其徵發ニ應ス可キ人員亦同シ
 第十條 徵發書ハ徵發令第六條ニ依リ府知事縣令郡區長戶長若クハ停車場長船舶會社ノ店長ニ付ス可シト雖モ陸戰若クハ合

圖ノ地ニ在テ時機切迫シタル場合ニ於テハ府縣ニ付ス可キモノヲ郡區又ハ町村ニ付シ郡區ニ付ス可キモノヲ町村ニ付シ店長ニ付ス可キモノヲ船長ニ付スルコトアル可シ
 右ノ手續ヲモ爲ス能ハサル場合ニ於テハ徵發書ヲ出スノ權アル官憲ヨリ直ニ人民ニ賦課シテ徵發スルコトアル可シ但此場合ニ於テハ徵發書ヲ用ヒズ本人ニ受領證票ヲ交付スルニ止ル本條ノ場合ニ於テハ徵發ヲ行ヒタル官憲定例ノ順序ニ從ヒ府知事縣令郡區長戶長若クハ店長ニ其旨ヲ通知ス可シ
 第十一條 徵發ノ命令ヲ受ケタルモノハ晝夜ヲ別タズ速ニ其處置ヲ爲ス可シ
 第十二條 徵發書ヲ受ケタル徵發區ニ於テ賦課ノ數ニ不足スルトキハ速ニ供給ヲ受ク可キ官憲ニ報告スヘシ
 町村ニシテ郡區長ヨリ徵發ノ賦課ヲ受ケ郡區ニシテ府知事縣令ヨリ徵發ノ賦課ヲ受ケタルトキ其賦課ノ數ニ滿ル能ハサルニ於テハ戶長ハ郡區長ニ郡區長ハ府知事縣令ニ速ニ其旨ヲ報告ス可シ但此場合ニ於テハ陸海軍官憲若クハ府縣廳郡區役所ヨリ吏員ヲ派出シ檢査セシムルコトアル可シ
 郡區長府知事縣令其報告ヲ受ケタルトキハ郡區長ハ他ノ町村ニ府知事縣令ハ他ノ郡區ニ賦課シテ供給ヲ完全セシム可シ
 第十三條 府知事縣令徵發令第十二條第一項ニ係ル徵發書ヲ受ケタルトキハ速ニ其賦課シタル郡區ノ名及ヒ量數ヲ陸海軍官憲ニ報告ス可シ

第十四條 府知事縣令郡區長及ヒ戶長ハ徵發令第八條ニ從ヒ徵發ニ應スル便宜ノ方法ヲ豫定ス可シ

第十五條 徵發ヲ課セラレタルモノ供給ノ時期ニ違ヒタルトキハ徵發令第九條ニ照シ處分ス可シト雖モ正當ノ事由ヲ證明シタルトキハ辨償セシムルノ限ニアラス

第十六條 徵發令第十一條ニ掲クル受領證票ハ附錄第二號雛形ニ依リ調製ス可シ

第十七條 受領證票ハ徵發令第十三條第一項第五項ノ物件及ヒ總テ買上ケニ屬スル物件ニ係ルトキハ領收ノ際直ニ之ヲ交付シ其他ハ徵用濟ノ後之ヲ交付ス可シ但徵用濟ノ後交付スル場合ニ於テハ同令第十三條第四項第七項第八項第十三條第一項中造船所工作所第四項及ヒ第五項ニ掲クルモノヲ除クノ外當初領收ノ際假受領證ヲ交付ス可シ

第十八條 徵發令第十三條第二項第三項及ヒ第十三條第二項ニ掲クルモノヲ宿泊セシメテ連日使用シ若クハ六里以外ノ地ニ於テ使用スルトキ並ニ同令第十二條第六項ニ掲クルモノ及ヒ船橋ヲ借切トシテ徵用スルトキハ特ニ本人若クハ操業者ニ受領證票ヲ交付スルコトアル可シ

第十九條 徵用十五日以上ニ及フモノハ一個月ニ一回若クハ二回期ヲ定メテ受領證票ヲ交付ス可シ

第二十條 徵發令第十二條第一項ニ掲クルモノ、徵發ヲ賦課スルハ其物品ノ營業者ヲ先トシ尙ホ完全セサルキニ限り他ノ人

民ニ賦課ス可シ其賦課ニ就テハ其地方及ヒ所有者ヲシテ困乏ニ陥ヒラサラシムル爲メニ相當ノ分量ヲ各所有者ノ許ニ殘シ置ク可シ其分量ハ其地運送ノ便否及ヒ生計ノ現況ヲ酌量シテ之ヲ定ム可シト雖モ此ニ其最下限ヲ定ムルコト左ノ如シ

一 營業者所有ノ物品ハ徵發書ノ日付ヨリ前十日間ニ其府縣内ニ賣拂ヒタル量但所有者ノ帳簿ニ基キ算定ス可シ

二 他ノ人民所有ノ物品ハ其一家ニ要スル十日間ノ量

三 秣藁ハ其家畜ニ要スル七日間ノ量

第二十一條 郡區長ハ附錄第三號雛形ニ依リ毎年一月一日調テ以テ徵發物件表ヲ製シ之ヲ府縣廳ニ差出シ府縣廳ハ其年三月三十一日限り之ヲ陸軍省ニ送付ス可シ

第二十二條 郡區長ハ徵發物件表ノ副本ヲ其役所ニ備ヘ戶長ハ町村ニ係ル書類ヲ其役場ニ備ヘ置キ物産ヲ除クノ外増減ヲ記シ供給ノ便宜ニ供ス可シ

第二十三條 徵發物件表ハ左ノ諸項ニ照シ調製ス可シ

一 馬匹車輛ハ其郡区内ニ於テ登時實用ヲ爲スモノ

二 人夫ハ其郡区内ニ於テ負擔ニ係ル業体ヲ爲スモノニシテ年齢十七歳ヨリ六十歳迄ノモノ

三 厩園倉庫ハ貸底貸庫ニ限ル

四 職工ハ總數ヲ表中ニ掲ケ備考中ニ就キ其業体ヲ分テ記ス可シ

五 官廨社寺學校屠場水車場ノ坪數ハ調査ニ及ハス

六 物産中米麥等ノ如キハ其高ヲ記ス可シ
 七 郵便局アル町村ニハ其爲替局ハ◎電信分局ハ◎其線路
 ハ鐵道ハ一ノ符號ヲ附ス可シ
 第二十四條 府知事縣令ハ郡區長ヨリ受ケタル徵發物件表ニ照
 シ附録第四號雛形ニ依リ其管下ニ係ル徵發物件概覽表ヲ製シ
 各郡區徵發物件表ト共ニ陸軍省ニ送付ス可シ
 第二十五條 戶長ハ附録第五號雛形ニ依リ毎年一月一日調チ以
 テ船舶表ヲ製シ郡區長ヲ經テ之ヲ府縣廳ニ差出シ府縣廳ハ其
 年三月三十一日限り之ヲ海軍省ニ送付ス可シ
 第二十六條 徵發令第十二條第三項第六項第七項ニ掲グルモノ
 ハ總テ使用ノ爲メニ必用ナル屬具ヲ併セテ供給ス可キモノト
 ス故ニ其屬具ニ對スル賠償ヲ請求スルコトヲ得ス
 第二十七條 徵發令第十二條第六項ニ掲グル船舶中郵便船ニ限
 リ其通信ノ用ニ供スル間ハ之ヲ借切ルコトヲ得ス又出船ノ定
 期若クハ航路ヲ變シテ徵用スルコトヲ得ス
 第二十八條 徵發令第十八條中居住者ノ起臥ニ必要ナル場所ト
 ハ寢所及ヒ庖厨ヲ指シ營業ニ必要ナル場所トハ商估ノ店舖農
 工ノ仕事場ヲ言フ又旅店等トハ料理店貸坐敷貸廐等ヲ包含ス
 第二十九條 宿舍ノ廣狹ハ徵發令第十九條ニ從ヒ臨時ニ定ムル
 モノナリト雖モ戶長ニ於テ賦課ノ際標準ト爲ス可キモノヲ概
 定スルコト左ノ如シ
 一 廩署 陸海軍官憲ヨリ指示スル

二 將官其參謀部ト共ニ 一室
 三 上長官又ハ同等軍屬一名 一室
 四 士官又ハ同等軍屬二名 一室
 五 下士又ハ同等軍屬一名 一疊半乃至二疊
 六 卒又ハ同等軍屬一名 一疊乃至一疊半
 七 徵發ニ應ジタル人員三名 二疊
 第三十條 戶長ハ陸海軍ノ宿制主任官ニ商議シテ適宜ニ宿舍ノ
 配當ヲ定ム可シ
 第三十一條 徵發令第二十一條ニ從ヒ町村ノ便宜ヲ以テ他ニ轉
 移セシムルコトヲ許サスト雖モ若シ該家ニ病者死者等アルト
 キハ戶長他ニ相當ノ宿舍ヲ設ケテ轉移ヲ請求スルコトヲ得但
 之カ爲メ徵發令第二十二條ニ掲グル日限ヲ更新スルモノニア
 ラス
 第三十二條 徵發令第二十二條ニ從ヒ人馬ニ供給ス可キ食飼ノ
 定量大率ヲ左ノ如シト雖モ陸海軍給與ノ規則ニ由リ定量以內
 ナリテ臨時ニ變換或ハ減少スルコトアル可シ
 一 人 精米每食二合 朝夕飯一汁一菜漬物 午飯一菜漬物
 二 馬 駐軍中 朝大麥二升秣藁五百目 喰藁五百目 晝秣
 二百目 演習及ヒ行軍中 朝大麥二升秣藁五百目 晝大麥一

升 夕大麥二升 秣藜一貫目 喰藜五百目
 小麥ヲ大麥ニ喰藜ヲ秣藜ニ代用スルトキ 朝小麥一
 升 喰藜一貫目 晝小麥五合 夕小麥一升五合 喰藜二
 貫目
 搗麥又ハ裸麥ヲ大麥ニ喰藜ヲ秣藜ニ代用スルトキ
 朝搗麥又ハ裸麥一升 喰藜一貫目 晝搗麥又ハ裸麥一
 升 夕搗麥又ハ裸麥二升 喰藜一貫目
 穀類ハ軍馬一頭ニ付一日一貫目ヲ要スルモノトス
 第三十三條 宿舍ノ徵發ヲ課セラレタルモノハ室内所要ノ燈火
 並ニ其地ノ慣用ニ從ヒ地爐若シハ火鉢（附設）毎室ニ一個ヲ給ス
 ス可シ其賠償ハ宿舍ノ賠償金額中ニ包含ス
 第三十四條 寢具ノ徵發ニ係ル賠償ハ宿舍ノ賠償金額中ニ包含
 セス徵發令第四十八條ニ從ヒ賠償ス
 第三十五條 宿舍ノ徵發ヲ課セラレタルモノ（公有家屋 社 寺 亦同）食飼ニ
 供ス可キ物品又ハ手傳人不足シ供給ヲ爲シ能ハサルノ證アル
 トキハ戶長ニ於テ賄ノ受負ヲ立ツル數若クハ物品及ヒ手傳人
 ナ其本人ニ供スル等ノ取扱ヲ爲シ其方法ハ本條例第十四條ニ
 准ス可シ
 第三十六條 町村ヨリ供給スル所ノ船舶ニシテ其乘載人馬ニ要
 スル食飼ノ物品不足スルトキハ戶長ニ於テ其物品ヲ供ス可シ
 但航海先ニ於テ本條例第三十七條ニ准シテ處分ス可シ
 第三十七條 會社ヨリ供給スル所ノ船舶ニシテ其乘載人馬ノ食

飼ヲ供給スルコト能ハサルヲ證明スルトキハ現品ヲ官給シ其
 費用ハ賠償金ヲ以テ差引テ立ツ可シ
 第三十八條 食飼ノ定賃ナキ船舶ヲ徵用シ船主船長ヲシテ其食
 飼ヲ供給セシムルトキハ陸海軍官憲ニ於テ其時々賠償金額ヲ
 定ム可シ其借切トシテ徵用シタルトキ亦同シ
 第三十九條 徵發物件ノ差出場所ハ各徵發區内ニ設クルチ定例
 トス但府縣ヲ以テ徵發區ト爲スモノ、差出場所ハ賦課セラレ
 タル郡區ニ一個所若シハ二個所ヲ設ク可シ
 差出場所ハ陸海軍官憲之ヲ指定ス
 第四十條 徵發區ハ徵發令第三十條ニ從ヒ徵發物件ヲ差出場所
 ニ輸送スルノ義務アルチ以テ之カ爲メニ生シタル費用ハ其區
 ノ負擔トス可キモノトス
 第四十一條 郡區長ハ徵發人馬ノ供給ヲ便宜ニセシムルカ爲メ豫テ隣
 郡區長ト商議シ近傍町村ヲ適宜ニ割合ヒ組合町村ヲ定ムルチ得
 第四十二條 賠償金請求ノ月日及ヒ場所ハ供給ヲ受ケシ陸海軍
 官憲ヨリ之ヲ其府知事縣令郡區長戶長若シハ停車場長船舶會
 社ノ店長ニ指示ス可シ
 第四十三條 府知事縣令郡區長戶長若クハ停車場長船舶會社ノ
 店長ハ附錄第六號ノ例ニ准シ賠償金計算書ヲ調製シ陸海軍官
 憲ヨリ交付ノ受領證票ヲ添ヘ其請求ヲ爲ス可シ但徵發令第三
 十六條及ヒ第三十八條ニ掲クルモノアルトキハ其計算書ニ別
 項ヲ設ケテ差引テ立ツ可シ又評價ニ屬スル件目ノ賠償ハ別途

ヨ支給スルヲ以テ該件目ニ就テハ評價ノ二字ヲ記載ス可シ
 第四十四條 徵發令第三十一條ニ定ムル三個月ノ期限ハ受領證
 票ヲ交付シタル月ヨリ起算ス但陸海軍官憲ヨリ指示セシ請求
 ノ月日若クハ場所ヲ其請求者ニ於テ誤リタル爲メ又ハ賠償金
 計算書ノ違算若クハ不合式ニ依リ推問往復ノ爲メニ消費シタ
 ル時日ハ算入セズ
 第四十五條 徵發令第十二條第二項及ヒ第三項ノ徵發ニ係ルモ
 ノヲ終日若クハ連日使用スルトキ及ヒ六里以外ノ地ニ使用ス
 ルトキハ日割ヲ以テ賠償シ其他ノ場合ニ於テハ里程ニ應ジテ
 賠償ス
 若シ差出場所ニ集合シタルモノ官ノ都合ニテ不用トナリタル
 トキハ日割ヲ以テ賠償ス可キモノハ半日分ヲ給シ里程ニ應ジ
 テ賠償ス可キモノハ其半額ヲ給ス
 第四十六條 徵發物件ノ毀損シタルトキハ徵發令第三十三條ニ
 從ヒ其使用ヲ主管スル陸海軍官憲ニ届出可シ若シ引渡ヲ受ケ
 タル後毀損ヲ發見セシトキハ其引渡ヲ爲セシ陸海軍官憲ニ届
 出可シ其官憲既ニ出發セシトキハ戸長ニ届出可キモノトス
 第四十七條 毀損ノ届出ヲ受ケタル陸海軍官憲ハ直ニ之ヲ調査
 シ其毀損果シテ使用ヨリ生シタルモノト檢定シタルトキハ其
 賠償金額ニ就キ供給者ト商議ス可シ若シ調和セサルトキハ評
 價委員ニ付ス可シ
 戸長若シ毀損ノ届出ヲ受ケタガハ直ニ之ヲ檢査シ其調査

書ヲ作り供給者ハ請求金額ヲ其關係ノ陸海軍官憲ニ差出ス可
 シ但調査書ニハ毀損ノ事由實況並ニ請求金額ニ係ル自己ノ意
 見ヲ記ス可シ
 第四十八條 徵發令第三十三條ニ掲クル期日ヲ超エタル届出ハ
 之ヲ受理ス可カラズ但變災厄難ニ罹リタルノ確證アルモノハ
 其變災厄難ヲ免レタル時ヨリ期日ヲ算ス可シ
 第四十九條 徵發令第三十四條ニ從ヒ府知事縣令ハ其管下市場
 三ヶ所以上ノ前三年間ノ平均價表ヲ第七號雛形ニ依リ調製シ
 毎年三月三十一日限リ陸軍省ニ差出ス
 第五十條 徵發令第三十五條中平常ノ賃價トアルハ戰時若クハ
 事變ニ際シテハ勿論演習又ハ行軍ノ際ニ於テモ之カ爲メ臨時
 ニ騰貴セサル以前ノ賃價ヲ言フ
 第五十一條 徵發令第三十五條及ヒ第三十八條ニ掲クル平常ノ
 賃價雇賃借賃ハ郡區長確認ノ上供給ヲ受クル所ノ陸海軍官憲
 ニ申出可シ
 其他徵發令中ニ掲クル平常ノ賃價損料及ヒ代價ハ戸長ヨリ陸
 海軍官憲ニ申出可シ
 第五十二條 徵發令第三十九條ニ從ヒ陸海軍省ニ於テ定ム可キ
 所ノ賠償金ハ兩省同額ナル可シト雖モ本條例第三十二條ニ從
 ヒ臨時ニ食料ノ定量ヲ變換若クハ減少スルニ於テハ其現量ニ
 從ヒ賠償ス可シ

附錄 第一號ノ一

徵發書

一 宿舍 麻器用 下士官 幾人 上長官 幾人 士官 幾人 兵卒 幾人

右ハ 某月某日ヨリ 某月某日迄 徵用

一 厩圍 幾匹分

右、 、 、 幾坪

一 倉庫 幾艘

右、 、 、

一 舩船 幾艘

右、 、 、

一 何々

右、 、 、

前書ノ通徵用候條其町(村)ニ於テ遲滞ナク供給可致事

何々長

年 月 日

官姓名印

某府(縣)某郡(區)

某町(村)戸長役場宛

備考 徵發書ノ料紙ハ美濃郵紙タル可シ

附錄 第一號ノ二

徵發書

一人夫

右内

幾人

幾人ハ 某月某日時 某地ニ差出シ 某地迄 徵用
幾人ハ 某月某日時 某所ニ差出シ 幾日間 徵用

一 駄馬 幾匹 馬士共

右内

幾匹、 、 、

一 何々 幾匹、 、 、

右内

何、 、 、

一 何々

右内

何、 、 、

前書ノ通徵用候條其郡(區)ニ於テ遲滞ナク供給可致事

何々長

年 月 日

官姓名印

某府(縣)

某郡(區)役所宛

附錄 第一號ノ三甲

徵發書

一 派船 船名
一 西洋形風帆船 船名
右某月某日ヨリ借切徵用候條某港ニ於テ遲滞ナシ供給可致事
何々長

年 月 日

官姓名印

某會社某地店長宛

附錄 第一號ノ三乙

徵發書

一 將校並同等官 幾名
一 下士卒並同等 幾名
一 馬 幾匹
一 車 幾輛
一 荷物略計 幾噸
右ハ某月某日某港出帆ノ何號船ヲ徵用シ又ハ其社所有ノ何號船
ヲ徵用シ某月某日某港出帆某港ニ運送爲致候條遲滞ナシ供給可
致事
何々長

年 月 日

官姓名印

某會社某地店長宛

附錄 第一號ノ四

徵發書

一 上等 幾名内ハ、
一 中等 幾名内ハ、
一 下等 幾名内ハ、
一 馬 幾匹内幾匹ハ某地迄餘ハ某地
迄
一 車 幾輛内幾輛ハ、
一 荷物略計 幾噸内幾噸ハ、
右ハ通常(特別派車ヲ徵用シ某月某日時發車ヲ以テ某地へ運送候
條遲滞ナシ供給可致事
何々長

年 月 日

官姓名印

鐵道會社某地停車場長宛

附錄 第一號ノ五

徵發書

一 玄米 幾百石
一 精米 幾十石

徵發令

幾貫目

一薪
一何々
右徵用候條某月某日限リ供給可有之事

何々長

官姓名印

某府(縣)宛

年月日

附録 第一號ノ六

徵發書

一某府(縣)某郡(區)某町(村)近傍
右某月某日演習ノ爲メ徵用候事

何々長

官姓名印

某町(村)戸長役場宛

年月日

附録 第二號ノ一

受領證票

一宿舍 辨器用 將官幾人 上長官幾人
右 士官幾人 下士官幾人 兵卒幾人
一庭園 幾四分
右、

幾四分

一倉庫 幾坪
右、
一舩船 幾艘
右、
一何々
右、
前書ノ通徵用候也

幾坪

幾艘

何々長

官姓名印

某府(縣)某郡(區)

某町(村)戸長役場宛

年月日

備考 受領證票ハ總テ存留證票ノ式ナル可シ

附録 第二號ノ二

受領證票

一人夫

幾人

右内

幾人ハ某月某日時某地ニ差出シ某地迄徵用
幾人ハ某月某日時某所ニ差出シ幾日間徵用

一駄馬

幾匹馬士共

右内

徵發令

幾匹、
一何々
右内
何、
一何々
右内
何、
前書ノ通徴用候也

年月日

某府(縣)
某郡區役所宛

何々長
官姓名印

附録 第二號ノ三甲
受領證票

一 瀛船
一 西洋形風帆船
右ハ某月某日ヨリ某月某日迄借切徴用
前書ノ通徴用候也

年月日

何々長
官姓名印

某會社某地店長宛

附録 第二號ノ三乙

受領證票
一 將校并同等官
一 下士卒并同等
一 馬
一 車
一 荷物畧計
右ハ某月某日某港出帆ノ何號船ヲ某月某日某港迄徴用
前書ノ通徴用候也

幾名
幾名
幾匹
幾輛
幾輛

年月日

某會社某地店長宛

何々長
官姓名印

附録 第二號ノ四
受領證票

一 上等
一 中等
一 下等
一 馬
一 車

幾名内幾名ハ某地迄餘ハ某地迄
幾名内、
幾名内、
幾匹内幾匹ハ某地迄餘ハ某地迄
幾輛内幾輛ハ、

徵發令

一 荷物零計
右、某月某日時通常特別運車徵用
前書ノ通徴用候也

年月日

鐵道會社某地停車場長宛

何々長
官姓名印

附錄 第三號ノ五

受領證書

一 玄米

幾百石

一 精米

幾拾石

一 薪

幾貫目

一 何々

前書ノ通徴用候也

年月日

某府縣宛

何々長
官姓名印

附錄 第三號ヨリ第七號迄略之

○第十四類

○布告布達施行期限 明治十六年五月
第十七號布告

沿革略記

明治元年三月舊幕府ノ揭榜ヲ撤シ更メテ五條ヲ揭示
スルモノトス○同年四月布告書類達方規則ヲ定ム○六年二

月第六十八號ヲ以テ諸布告發令毎ニ人民熟知ノ爲メ凡三十
日間便宜ノ地ニ揭示セシメ又從前ノ高札面ハ人民熟知スル
ヲ以テ取除カシム○同年三月司法省第四十九號ヲ以テ布告
達類地方官ヨリ管下ニ布達ノ月日届出シム七月ニ至リ同省
第百十二號ヲ以テ届出ニ及ハストス○同年六月第百四號
ヲ以テ布告書類卷册ノ類ト雖モ盡ク揭示スヘキモノトス○
同月第百十三號ヲ以テ各府縣ニ諸布告到達ノ日數ヲ定メ
三十日間揭示ノ後ハ管内一般人民熟知スルモノト看做ス旨
ヲ達ス○同年七月北海道ニ限リ各所到達揭示ノ初日ヲ以テ
取廻メ開拓使ヨリ届出ルヲ許ス○七年四月第四十八號達ヲ
以テ從前ノ布告布達ノ揭示方ヲ廢シ更ニ布告布達共該地到
達ノ翌日ヨリ廢寫等ノ日數三十日ヲ除キ其翌日ヨリ三十日
ヲ經過セハ人民一般知得タルモノト見做ス旨ヲ達ス○十六

年五月第十七號布告ヲ以テ從前令スル所ヲ改メ更ニ布告布達ノ施行期限ヲ制定ス是レ現行法ナリ

布告布達ノ施行期限左ノ通制定ス

第一條 布告布達ハ各府縣廳到達日數ノ後七日ヲ以テ施行ノ期限ト

ナス但到達日數ハ布達ヲ以テ之ヲ定ム

天災時變ニ因リ到達日數内ニ到達セサルトキハ其到達ノ翌日ヨリ起算ス

函館縣沖繩縣札幌縣根室縣ハ到達日數ヲ定メス現ニ縣廳ニ到達シ

タル翌日ヨリ起算ス

凡島地ハ所轄郡役所ニ到達ノ翌日ヨリ起算ス

第二條 布告布達ノ特ニ急施ヲ要シ即日ヨリ施行セシムル者及特ニ施行ノ日ヲ掲ケタル者ハ總テ前條ノ例ニ在ラス

○布告布達到達日數第十六年五月
今般第十七號ヲ以テ布告布達施行期限ヲ改定シタルニ付到達日數左ノ通之ヲ定ム

京都府	大坂府	神奈川縣	兵庫縣	長崎縣	新潟縣	埼玉縣	群馬縣	千葉縣	茨城縣	栃木縣	三重縣	愛知縣	靜岡縣	山梨縣	滋賀縣	岐阜縣	長野縣	宮城縣	福島縣	岩手縣	
四日	四日	即日	四日	十四日	十五日	即日	即日	即日	即日	即日	二日	三日	二日	二日	二日	二日	四日	四日	五日	四日	七日

布告布達施行期限

青森縣	山形縣	秋田縣	福井縣	石川縣	富山縣	島根縣	岡山縣	廣島縣	山口縣	和歌山縣	德島縣	愛媛縣	高知縣	福岡縣	大分縣	佐賀縣	熊本縣	宮崎縣	鹿兒島縣	但馬山佐賀宮崎ノ三縣ハ開應ノ日マテ舊管廳ノ到達日數ニ依
十五日	八日	八日	七日	六日	六日	六日	六日	六日	六日	六日	六日	六日	六日	九日	九日	九日	九日	九日	九日	九日

○諸罰例處斷方 明治十四年十二月
第七十二號布告

明治十五年一月一日ヨリ刑法施行候ニ付法律規則中罰例ニ係ルモノ
ハ左ノ例ニ照シテ處斷スヘシ

- 第一條 凡懲役ハ十一日以上ヲ重禁錮ニ處シ十日以下ヲ拘留ニ處ス
- 第二條 凡禁獄及ヒ禁錮ハ十一日以上ヲ輕禁錮ニ處シ十日以下ヲ拘留ニ處ス
- 第三條 凡罰金及ヒ科料ハ貳圓以上ヲ罰金ニ處シ貳圓未滿ヲ五錢以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス
- 第四條 法ニ照シ律ニ照シ若クハ違令違式ニ照シ處斷ストアリ及

○ 答可申付トアルハ總テ貳圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第五條 法律規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ再犯加重及ヒ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第六條 法律規則中罰例アリト雖モ刑法ニ正條アルモノハ刑法ニ依テ處斷ス

第七條 前數條ノ罪ヲ犯シ拘留料料ニ處スル者ト雖モ輕罪裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

但始審裁判所所在ノ地ヲ除クノ外ハ治安裁判所ニ於テ之ヲ裁判スルヲ得

○ 北海道ニ施行セサル法律ハ從前ノ通明治十五年二月第九號布告

今般北海道ニ函館札幌根室ノ三縣ヲ被置候處法律規則ノ從前北海道

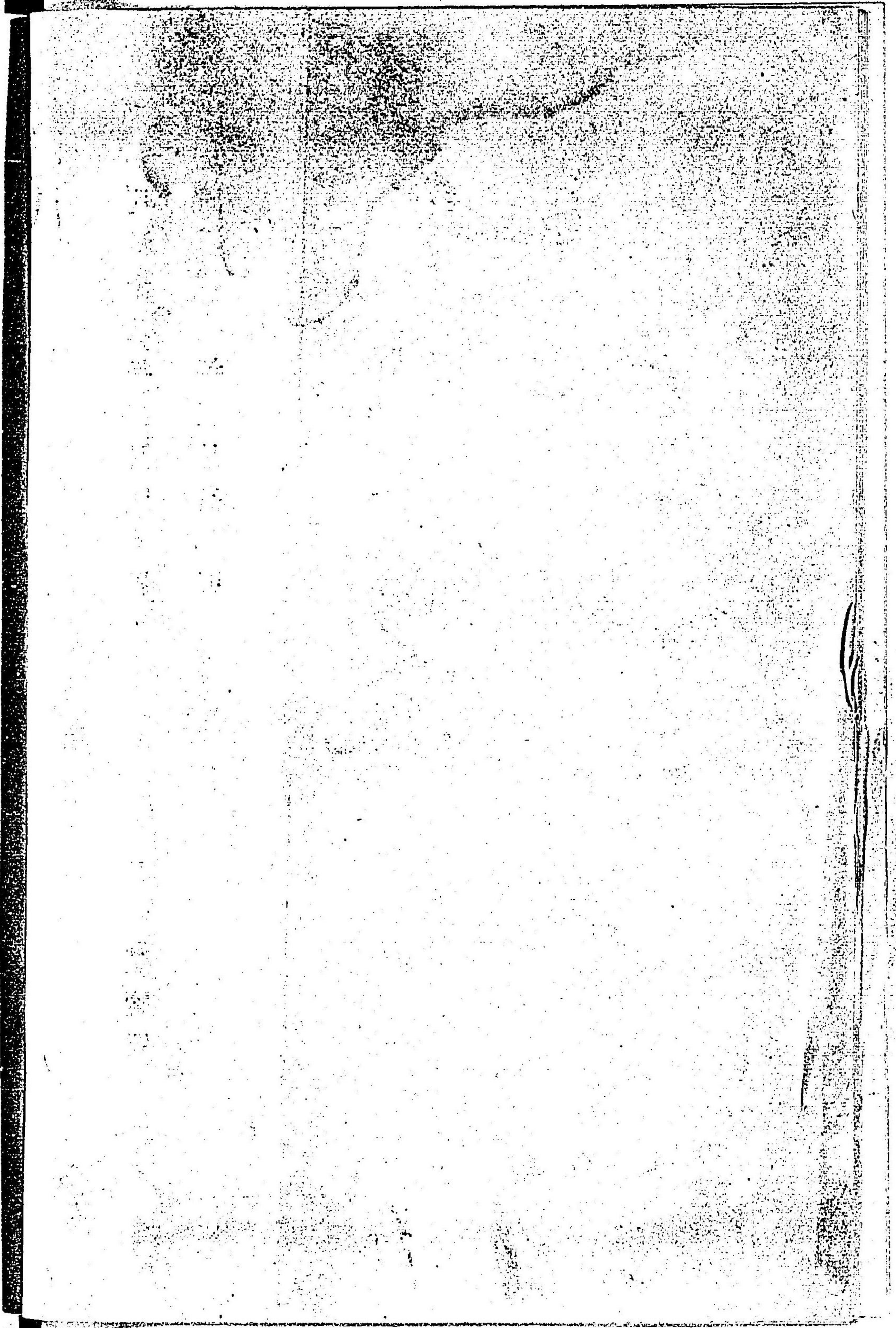
ニ施行セサルモノハ當分ノ内仍ホ從前ノ通タルヘシ

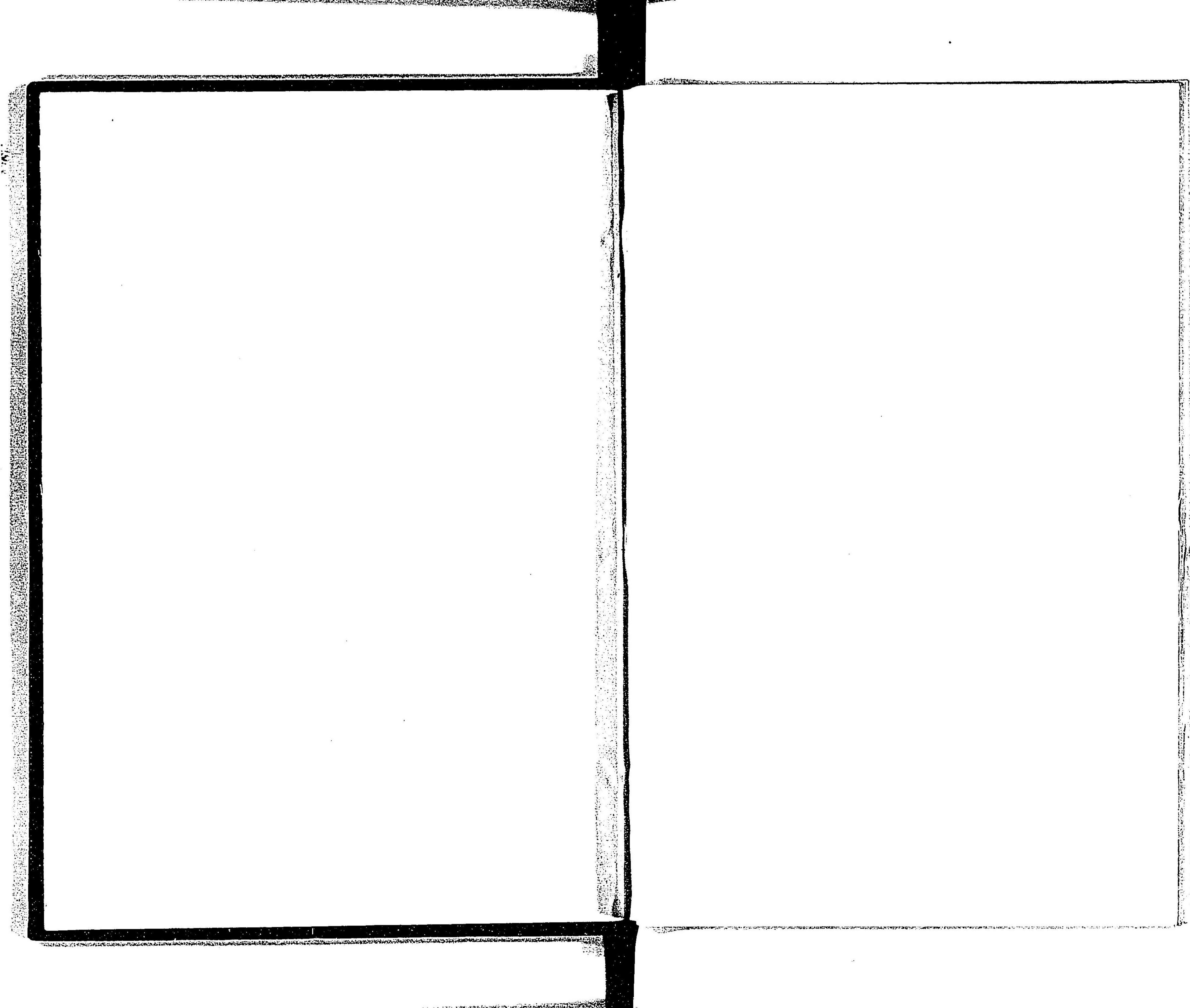
法規提要畢

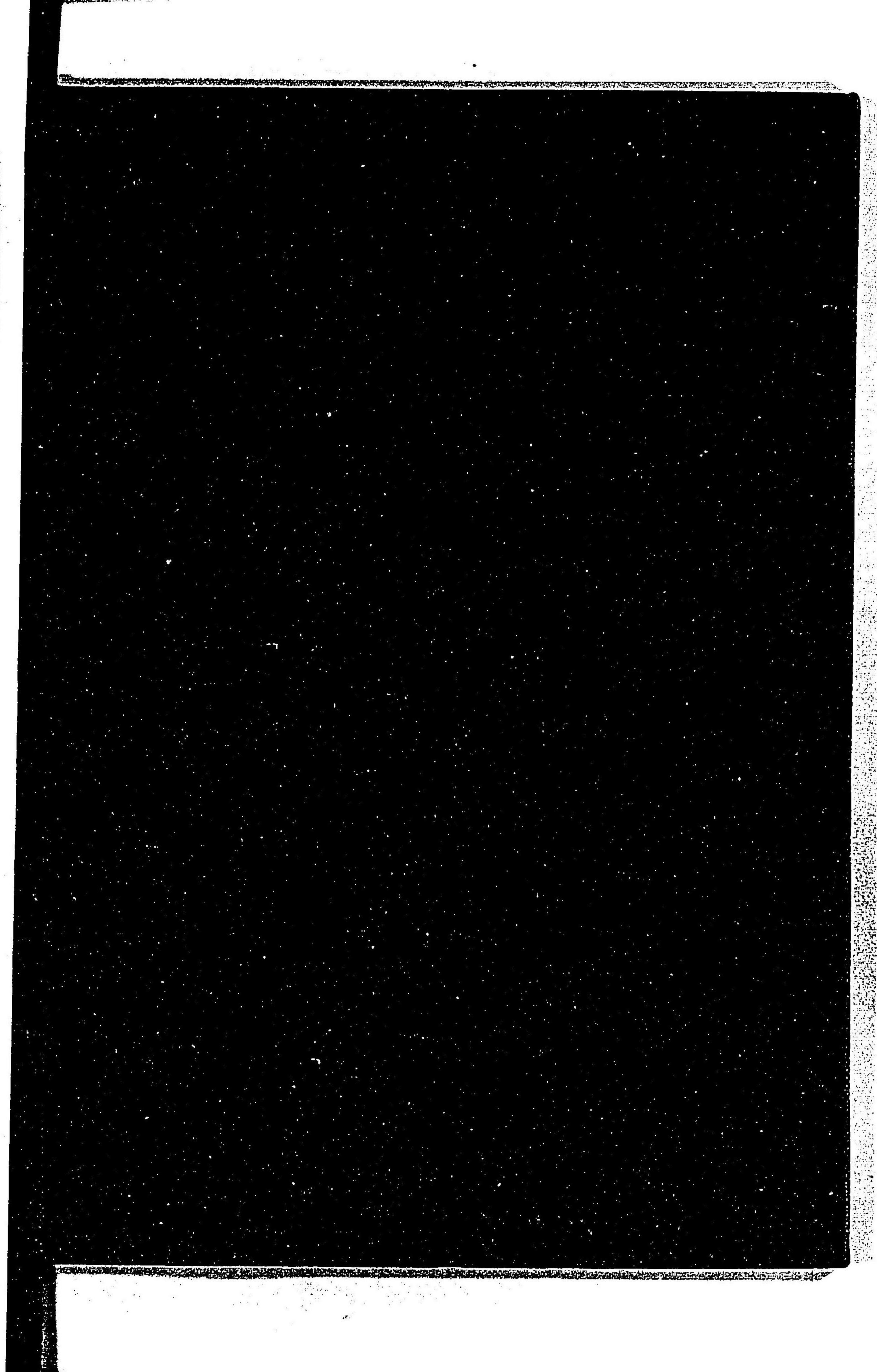
明治十八年二月版權屆

同 年三月出版

(禁賣買)







35
35

禁電子式複写

031113-001-7

CZ-3-09

法規提要

法制局

M18-36

BBC-0819



210